

平成26年度

青少年赤十字国際交流事業
“フィリピン派遣”

－実施報告書－



平成26年8月10日(日)～16日(土)



日本赤十字社福島県支部
青少年赤十字福島県指導者協議会



目 次

1. あいさつ（日本赤十字社福島県支部事務局長）	2
2. フィリピン派遣によせて（派遣団長）	3
3. 派遣団員名簿	4
4. 交流日程	5
5. 訪問地（図表）	6
6. 訪問記録	8
7. フィリピンを訪問して（派遣団員所感）	16
8. 自由研究（高校生団員）	37
9. 事前事後研修会の開催	48
10. 報告会の開催	49
11. 実施要項	50
12. 持参の交流物品 編集後記	52

※1 フィリピンの学校について

フィリピンの小学校は1～6学年、高校が1～4学年となっている。フィリピンの高校は日本の中学校の1～3年と高校の1年までにあたる。

※2 ソルト・パヤタスは、正式には「特定非営利活動法人ソルト・パヤタス」であるが、文中ではソルト・パヤタスと表記している。

あ い さ つ

日本赤十字社福島県支部

事務局長 野 崎 洋 一

東日本大震災から3年9カ月（平成26年12月現在）が経過しましたが、福島県では原子力発電所事故の影響もあり、いまだに12万人を超える多くの方が県内外での避難生活を余儀なくされています。

また、県内に住む私たちは毎日、新聞やテレビで廃炉作業や汚染水漏れなど原発関連のニュースを見たり聞いたりしています。多くの県民にとって東日本大震災は、終わってしまったことではなく現在進行形なのだと思います。

しかし、いったん県外に出ると東日本大震災についての報道は以前に比べると随分少なくなり、まして原発災害に苦しみながらも、復興に向けて懸命に歩んでいる福島県の状況はほとんど知られていないのではないかと思います。

東日本大震災の際、世界各国から日本に多くの支援が寄せられました。世界の赤十字社・赤新月社からも日本赤十字社に対し多額の救援金が寄せられ、その救援金を基に実施してきた復興支援事業により、多くの被災者、県民の皆さんがどれだけ勇気付けられ元気付けられたことでしょう。

私たちは、これらの支援に対する感謝の気持ちと、厳しい状況の中で復興に取り組む県民の姿を世界の人々に伝えていく義務があるのだと思います。

福島県の復興には長い時間がかかると思いますが、その担い手となるのは今の「福島」に生きる若者にはほかなりません。若い人たちは、「福島」の現実から目を背けることなくしっかりと前を向いて、ふるさとの復興に取り組んで欲しい、そして「福島」で日々の生活を送りながら懸命に復興に取り組む県民の姿を、国内にとどまらず海外へも積極的に情報発信して欲しいと思うのです。

日本赤十字社福島県支部の青少年赤十字国際交流事業「フィリピン派遣」は、青少年赤十字の実践目標の一つである「国際理解・親善」を具体的に実践するため、広く世界の国々に目を向け、海外の青少年赤十字メンバーとの交流等を通じて国際性豊かな青少年を育成することを目的に、平成18年度から実施してきました。

平成23年度、24年度については東日本大震災のため事業の休止を余儀なくされましたが、平成25年度から復興支援事業として再開しました。日本赤十字社福島県支部では、本県の復興の担い手となる若者を自然災害に苦しむことの多いフィリピンに派遣し、大震災に際して寄せられた支援への感謝と「福島」の今の姿を直接伝えるとともに、フィリピン赤十字社の活動状況を学びフィリピンの若者と交流を深めることにより、他人の苦しみを思いやり、あらゆる困難に立ち向かう強い心を持つ人間に育てたいとの思いからこの事業を企画しました。

平成26年度も復興支援事業として、青少年赤十字活動に取り組んでいる高校生8人を、指導教員2名・日赤県支部職員2名とともにフィリピンに派遣することができました。

7日間という短い期間ではありましたが派遣メンバーの高校生たちは、日本とは気候・風土・生活環境が全く違うフィリピンで、様々な体験をし多くの人々と交流することができました。この実施報告書に書かれた派遣メンバーのレポートを読んで、派遣メンバーの高校生たちが今回の国際交流事業を通して、ふるさと「福島」の復興につながる何かをつかんできたことを確信しました。彼らの今後の活躍を期待したいと思います。

終わりに、今回の国際交流事業実施に当たりご支援、ご協力をいただいた関係者の皆様に心より感謝を申し上げます。

「フィリピン派遣」に参加して

派遣団長

福島県立福島高等学校

佐々木 珠 恵

私たちは、第6回青少年赤十字国際交流事業「フィリピン派遣」のメンバーとして、平成26年8月10日から16日までの1週間、フィリピンを訪問しました。県内のJRCメンバー8名と引率教員2名、日本赤十字社福島県支部から職員2名、合計12名での今回の訪問は、大変有意義なものとなり、多くのことを自分の心で感じ、学ぶ貴重な機会となりました。

フィリピンでは、フィリピン赤十字社の本社をはじめ、たくさんの支部を訪問させていただきました。昨年の台風ヨランダの際にどのような支援活動を行ったのか、また現在の復興状況などのお話をうかがいながら、災害大国とも呼ばれているフィリピンでの赤十字の活動からは多くのことを学ぶことができると感じました。また、地域の学校を訪問し、お互いの活動報告や文化披露をして生徒達と交流をしました。私たちは、福島の代表として、東日本大震災の際にフィリピンからたくさんの支援をいただいたことに対する感謝の念を伝え、震災後の福島の現状について発表しました。さらに、フィリピン滞在中は、現地の赤十字ユースメンバーと多くの時間を共にし、バスの中や食事会でお互いに交流を重ねることができ、最後は本当に別れがたい様子でした。このように、この派遣事業の目的である、青少年赤十字の実践目標の一つ「国際理解・親善」を具体的に実践し、さらに「東日本大震災時の支援に対する謝意と福島の現状を伝える」という任務も、何とか果たすことができたのではないかと思います。

また、ごみ山があるパヤタス地区の訪問やラス・ピニャスのリサイクル施設の訪問を通して、貧困問題や環境問題、雇用の問題について、またバタアン原発の見学を通しては、まさに福島、いや日本が抱えている原発の問題について考えさせられました。「百聞は一見にしかず」とよく言いますが、現地を訪れ自分の心で感じ学んだものに勝るものはない、私自身心から感じました。

今回の「フィリピン派遣」は、台風接近により飛行機の出発が1時間遅れた以外、フィリピン滞在中は天候にも恵まれ、また誰一人として体調を崩すこともなく過ごすことができました。私個人としても、フィリピンの方々のホスピタリティーのすばらしさと、今回出会ったフィリピンの生徒たちのキラキラした真っすぐな瞳は、決して忘れられないものとなりました。そして、派遣メンバーも、普段の活動やTC（リーダーシップ・トレーニングセンター）で学んだ「先見」や「VS（ボランタリーサービス）」を実践しながら、全員が協力しあい、とても充実した訪問となったにちがいありません。今回の貴重な体験と自身の心で感じとったものを今後のJRC活動に活かし、その心を大きく育てていってくれることを願っています。最後に、非力な団長を補うのに余る力を發揮してくれた派遣メンバーと、今回の「フィリピン派遣」に際してご指導ご支援をいただいたすべてのみなさまに心から感謝申し上げます。



フィリピン赤十字本社で記念品贈呈、
平成26年11月フィリピン台風救援金を寄託

「フィリピン派遣」参加者



西野 剛生

福島県立
福島東高等学校
2年



澤田 夏子

学校法人成蹊学園
福島成蹊高等学校
2年



鬼頭朋加

福島県立
安積高等学校
2年



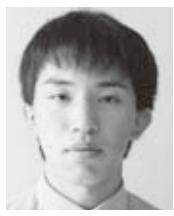
新田 優花

福島県立
あさか開成高等学校
1年



川井典恵

福島県立
白河旭高等学校
3年



花見涼

福島県立
喜多方桐桜高等学校
2年



小林憲人

福島県立
勿来工業高等学校
2年



佐川愛実

学校法人山崎学園
福島県磐城第一高等学校
2年



佐々木珠恵

福島県立
福島高等学校
青少年赤十字顧問



日下淑子

福島県立
福島東高等学校
青少年赤十字顧問



石田政幸

日本赤十字社
福島県支部
ボランティア係長



富田夕紀

日本赤十字社
福島県支部
総務課 主事

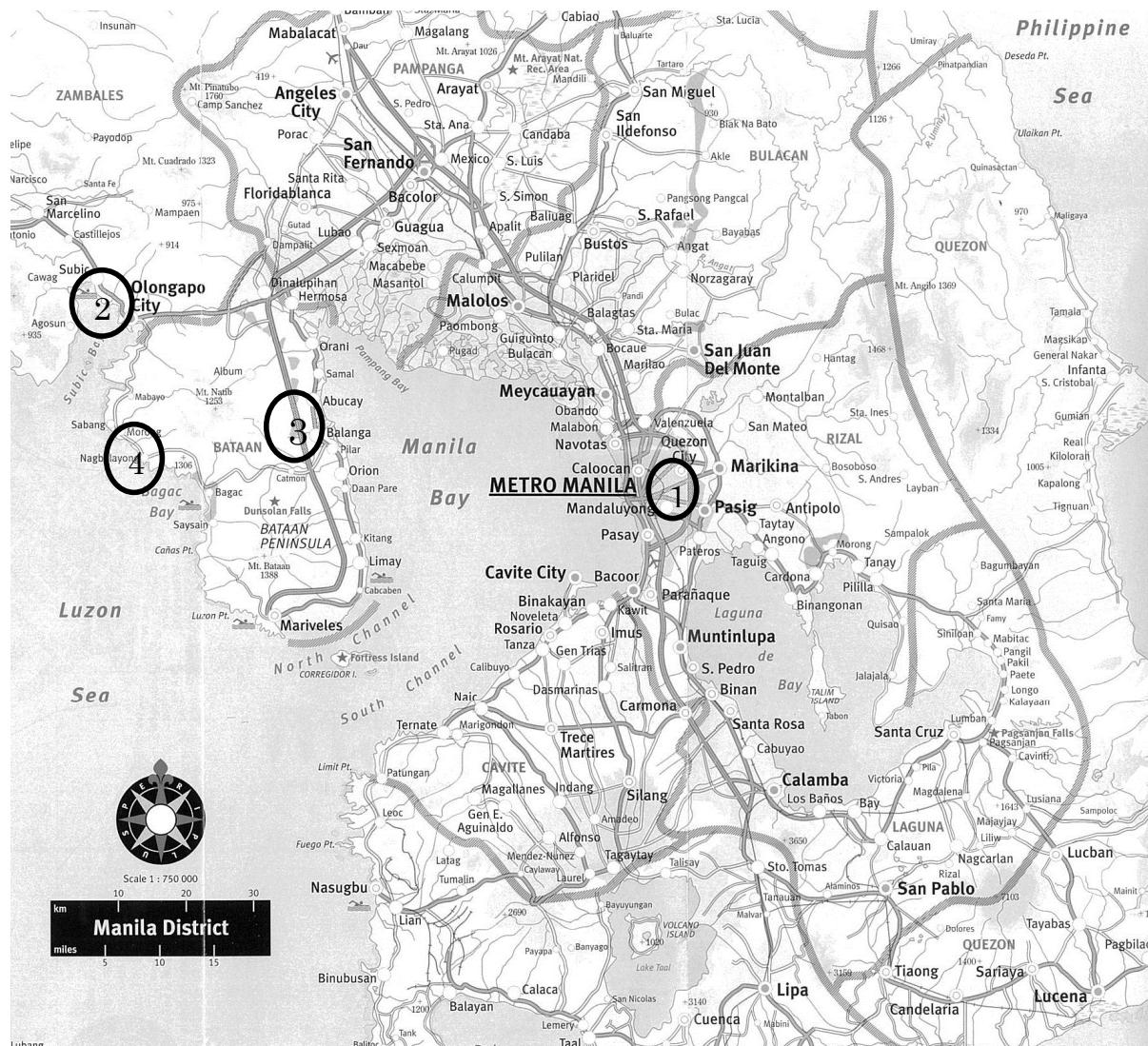
交 流 日 程

日付 曜日	第1日 8月10日 日	第2日 8月11日 月	第3日 8月12日 火	第4日 8月13日 水	第5日 8月14日 木	第6日 8月15日 金	第7日 8月16日 土
4							
5							
6		朝食	朝食	朝食	朝食	朝食	
7		移動	移動	ザンバレス州へ 移動	移動	移動	
8							
9	9:00 福島(支部)発 貸切バス～	フィリピン赤十字本社訪問	ケソン市支部訪問	サマット山 戦時中の遺跡等見学	ラス・ピニヤス リサイクル施設 4箇所 見学		6:30 ホテル発 7:00 NAIA 着
10	10:00 郡山駅前発		青少年赤十字加盟ハイスクール 訪問・交流会				
11	11:10 ファミマいわき 中央IC店発 (途中休憩)			オロンガポ市支 部訪問			
12		移動 昼食(市内レストラン) フィリピン赤十字 本社関係者と会食 移動	移動 昼食 ソルトパヤタス 訪問	移動	移動 昼食(ランチ弁当)	移動 昼食(ラス・ピニヤ ス市支部役員宅)	
13							
14	14:30 成田空 港第1T南W到着	マニラ市内 赤十字支部	交流プログラム③ ソルトのスタ ディツアー 住民との交流	交流プログラム④ 青少年赤十字加 盟ハイスクール 訪問・交流会	バタアン原発見学	モールオブアジア (東洋最大のショッピ ングセンター)見学	
15	チェックイン						入国手続き
16		交流プログラム① トンド地区青少 年赤十字加盟ハ イスクール訪問 交流会			マニラへ移動		
17		移動		移動休憩			
18	17:20 ANA NH949便	夕食 (市内レストラン)	移動 夕食(市内レストラ ン) フィリピン赤十 字副会長、ユース 代表と懇談会	バタアン支部訪問 夕食(市内レストラ ン) バタアン支部役 職員、ボラン ティアと懇談会	(途中 SAにて夕食)	移動 (途中 ホテルへ)	16:00 成田空港発 貸切バス
19							
20	20:55 マニラ 国際空港T3到着	ホテル到着 打合せ	ホテル到着 打合せ	ホテル到着 打合せ	ホテル到着 打合せ	お別れ夕食会 市内レストラン	
21							
22	ホテル着 打合せ					ホテル打合せ	
23	マニラ市内ホテル (デュシタニ マニラ) 到着	マニラ市内ホテル (デュシタニ マニラ)	マニラ市内ホテル (デュシタニ マニラ)	マニラ市内ホテル (Crown Royal Hotel)	マニラ市内ホテル (デュシタニ マニラ)	マニラ市内ホテル (デュシタニ マニラ)	福島(支部)着
宿泊							

訪問先、活動内容

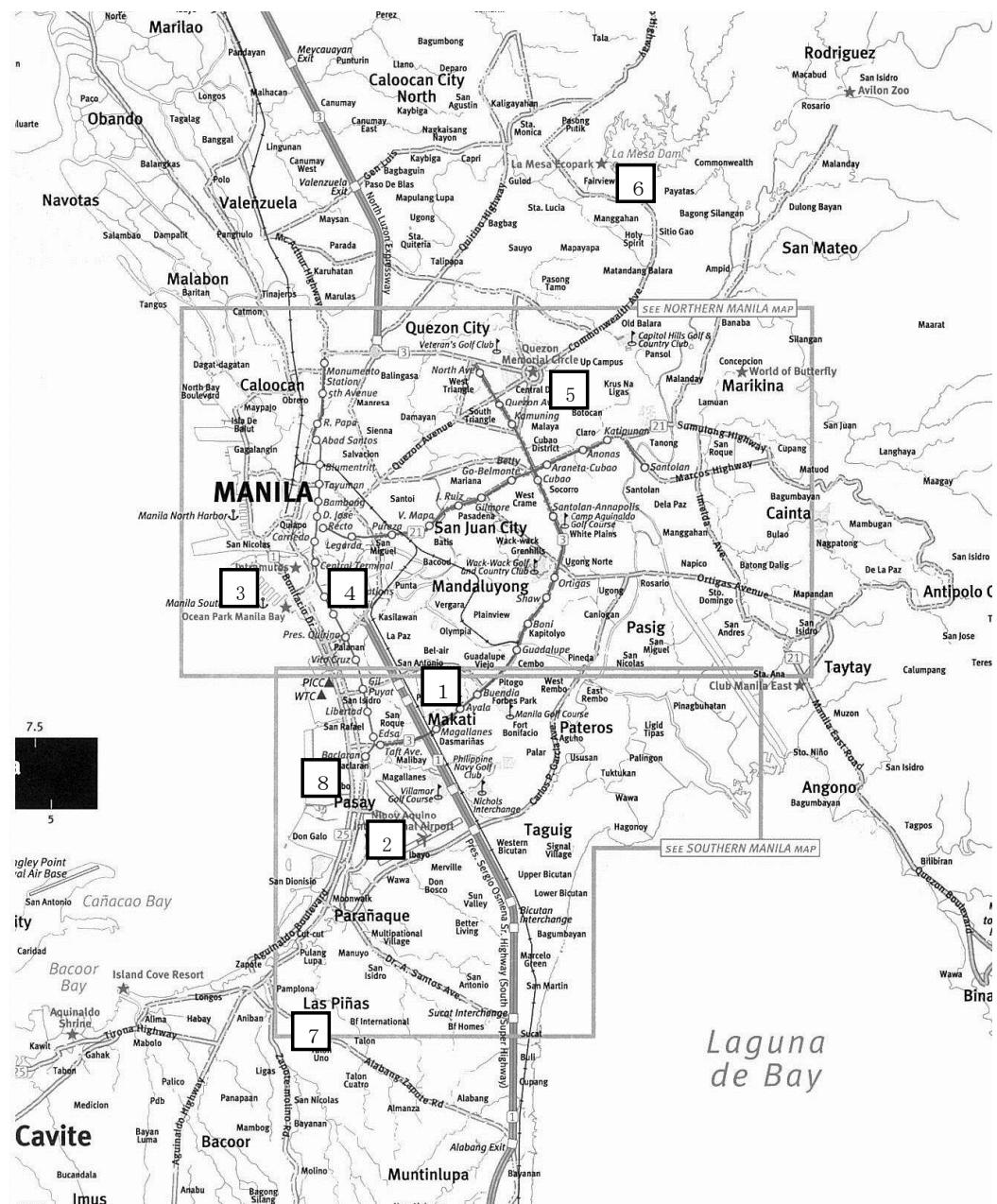
- マニラ首都圏、サンバレス州、バタアン州
- フィリピン赤十字本社 フィリピン赤十字支部
- 小学校、高校 (交流会、授業参観、先生の説明)
- 青年ボランティアとの交流
- 史跡見学 NGO活動視察・意見交換
- フィリピン赤十字事業実施個所見学
- など

訪問箇所（広域）



位置No.	訪問地	訪問日	活動内容
1	マニラ首都圏	8月11日(月)	午前：フィリピン赤十字本社 午後：マニラ支部、トンド地区ハイスクール訪問交流
1	マニラ首都圏	8月12日(火)	午前：ケソン市支部訪問、ハイスクール訪問 午後：ソルトパヤタス訪問、住民と交流
2 3	マニラ→サンバレス州→バタアン州	8月13日(水)	午前：ホテル→オロンガポ市支部 午後：バランガイ行事訪問、ハイスクール訪問、交流→バタアン州バランガ市へ移動、バタアン支部訪問
3 4	バタアン州	8月14日(木)	午前：サマット山、戦時の史跡見学 午後：バタアン原発見学→マニラへ移動
1	マニラ首都圏	8月15日(金)	午前：ラス・ピニヤス地区 リサイクル施設見学 午後：リサイクル施設見学、モールオブアジア見学

訪問箇所（メトロマニラ）



位置No.	訪問地（地名）	訪問日	活動内容
1	Dusit Thani Manila	8月10、11、12、14、15日	宿泊ホテル
2	ニノイ・アキノ国際空港	8月10日到着、16日出発	
3	フィリピン赤十字本社	8月11日(月) 午前	表敬訪問、報告
4	マニラ支部	8月11日(月) 午後	赤十字支部、学校訪問
5	ケソン市支部	8月12日(火) 午前	赤十字支部、学校訪問
6	Payatas (パヤタス)	8月12日(火) 午後	事業視察、家庭訪問、散策
7	ラス・ピニャス	8月15日(金) 午前～午後	リサイクル施設見学
8	パサイ (モールオブアジア)	8月15日(金) 午後	施設見学

訪問日誌

【1日目】8月10日(日) 天気: 日本→雨のち曇り フィリピン→晴れ 記録者: 鬼頭 朋加

●日 程

9:00 日赤福島県支部出発
10:00 郡山駅西口着
11:10 いわき着
14:30 成田空港着
18:20 成田空港発 全日空NH949便離陸
(フィリピン時間以下同)
21:10 マニラ国際空港着陸
22:00 デュシタニ・ホテル着 チェックイン

アメニティやバスタオルが一人分足りなく、石田さんにロビーに電話をかけてもらって持ってきてもらった。そんなところに大雑把な感じがしてそこは日本との違いを感じた。その後は、お風呂でどうやってシャワーを出せばいいのか迷ったが、どうにかなった。移動が多かったため疲れていて、フィリピンで過ごす初めての夜だったが、気持ちよく熟睡できた。



成田空港にて

●所 感

今日の日程の大半は移動だった。福島では雨が降っていたため、昼食が多少変更されたが、成田空港には予定通りに到着した。そこで日本赤十字社本社の松野さん、坂巻カメラマンと合流した。彼らは本社広報活動の一環として15日まで同行した。早速メンバーがインタビューを受けた。このことは派遣事業への心構えを再確認できたよい機会だった。またメンバー同士は軽い買い物をし、相互理解は深まった。離陸は滑走路の混雑のため予定より遅れたが、無事出発した。機内ではフィリピンへの入国カードなどの書類を書いたが全て英語だったためなかなか難しかった。

マニラ空港に着いてからは入国審査や荷物の受け取りなどをしたが、どちらも初めての体験であったが、自分の予想よりも早かったため少し慌ててしまった。外にでてすぐガイドのリンさん、運転手のナップさんに会いバスに乗ってホテルに向った。空港の外は少し暑かった。空港とホテルは近かったが少しバスに酔ってしまった。

デュシタニ・マニラホテルは私が日本でも泊まったことがないくらい広くてとても豪華だった。部屋に行くと、私たちは三人部屋だったのに

訪問日誌

【2日目】8月11日(月) 天候: 晴れ

記録者: 澤田 夏子、西野 剛生

●日 程

- 8:50 フィリピン赤十字本社
- 12:00 昼食
- 14:00 マニラ支部
- 15:00 ラカン・デュラ (LakanDula) 公立高校
- 18:00 市場 (YATAI RAMEN=ヤタイ ラーメン)

リピンの方と交流するのが初めてであったため、慣れず、控え目な自分であったが、次はもっと積極的にお話をしようという前向きな気持ちになった。

ラカン・デュラ公立高校では、盛大な歓迎にとても驚き、嬉しかった。日本のレベルだと中学生と高校生にあたる大きな学校だ。フィリピンの伝統文化であるスペイン風（フラメンコの様な）のダンスの披露があった。日本側の発表では、少し練習不足なところが目立ち、もたついてしまったことがあり、ホテルに帰ってから練習をしようと反省した。フィリピンの生徒さんは、普通に英語で話しかけてくれたが、理解できないことが多く、言いたいことをうまく言葉にできずとても悔しい思いをした。英語がうまく話せなくとも、簡単な言葉でもいいから自分から積極的に話しかけることがとても大切なのだと思った。しかし、この時の私の中には間違いを恐れている自分がいるため、消極的になってしまっていたことを反省した。

夕食は市場へ行き、そこで買った新鮮な魚介類を料理してもらったものを食べた。とても豪華で種類も多く、美味しく食べることができた。

本格的に活動する初日であった2日目は、とても充実した1日を過ごすことができた。“英語”について、“コミュニケーション”について深く考えさせられる1日であった。



好評だった絵描き歌

●所 感

フィリピン赤十字本社訪問では、2013年11月に起きた大きな台風災害に加え、今年起きた台風災害の話もスライドを交え詳しくお話を聞いた。情報管理室ではフィリピン国内全ての支部より情報を24時間体制で受け取ることが出来るようになっていた。台風はいつ来るかわからないので、もしされた被害に遭ってしまった場合はひどくならないようにしなくてはいけないと言っていた。今年の台風の際は、2013年の台風の経験を生かし、被害を小さくできたそうだ。フィリピン赤十字本社社長が東日本大震災の際、会議で日本に来て下さったと聞いた。また、日本人も台風災害が起きた時、すぐフィリピンにボランティアへ駆けつけたらしい。日本から寄付された救助工作車なども見せてもらったが、残念ながら日本語で標記されているため、使い方がわからない機能もあり困っているとも言っていた。日本でJRCの一員として活動している自分が、フィリピンのRED CROSSの活動を間近で見聞することができ、とても良い経験となった。

レストランでの昼食では、フィリピン本社の方々と一緒に食事をした。私の前に座ったジャンさんとは少しお話をしたがなかなかコミュニケーションをうまくとれなかった。しかし、笑顔を交わすことで心が通じあえた気がした。まだ、フィ

訪問日誌

【3日目】8月12日(火) 天気: 晴れ 記録者: 新田 優花

●日 程

- 8:00 ホテル出発
9:00 ケソン市支部訪問
11:00 バタサン・ヒルズ (Batasan Hills)
　　公立高校訪問
14:30 パヤタス地区訪問 (リカ (LIKHA)
　　センター・集落の視察、家庭訪問、
　　話し合い)
18:40 ホテル到着
19:30 夕食 (日本橋=日本食レストラン)

ためか、スマーキーマウンテンは想像した以上にとても大きくてたくさんのゴミが積み上げられていた。家庭訪問では、家の中を見せてもらい一日の生活について話を聞いた。

夕食は日本料理のお店に行き、久しぶりの日本食を堪能した。その日、フィリピン赤十字の若いメンバーのリーダーであるフランシスコさんが誕生日パーティーを抜け出して私たちのところに来てくれた。私たちは、フォーチュンクッキーを踊り、折り紙をプレゼントした。国會議員のミゲルさんとフランシスコさんは気さくな方たちで、すぐにメンバーと打ち解け、この日の夕食はとても盛り上がり、楽しい時間を過ごすことができた。

●所 感

赤十字のケソン市支部では、赤十字の行っている活動を教えてもらった。フィリピンは自然災害が多いので救助や食糧支援など多くの活動があり、若いボランティアメンバーたちの活動がとても活発だということが分かった。次にバタサン・ヒルズ公立高校では、「Welcome JRCS」という看板が立っておりたくさんの生徒たちに歓迎され、とても嬉しかった。女性は頭につぼのような器をのせる踊りを、何段にも器を積み重ねて頭でバランスをとるという踊りを見せてもらった。フィリピンの人は歌が上手な人が多く発表も素晴らしいものばかりであった。私たちは日本についての発表や浴衣の着付け、茶道のお手前、絵描き歌などを紹介し、全体的な発表は上手く出来た。

午後、私たちは貧困地域と呼ばれるパヤタス地区を訪問した。その地域に入るとバスから降りた瞬間、独特で鼻につくような臭いがし、マニラの都市部とは違った雰囲気だった。リカセンターでは、事務局長で日本人の小川恵美子さんからパヤタスやスマーキーマウンテンについての説明を受けた。フィリピンではゴミを燃やすことはしない



バタサン・ヒルズ公立高校生の民族舞踊

訪問日誌

【4日目】8月13日(水) 天気: 晴れ

記録者: 川井 典恵、花見 涼

●日 程

- 6:20 朝食（ホテル内）
- 10:45 オロンガポ市支部訪問
- 11:30 オロンガポ市コミュニティーセンター
- 12:20 昼食（ペッパー・ランチ）
- 13:30 オロンガポ市（Olongapo city）公立高校訪問
- 17:15 バタアン（Bataan）州支部訪問
- 19:15 ホテル到着
- 19:30 夕食（バタアン支部のRCYの皆さんと一緒に）

●所 感

4日目はマニラから離れたザンバレス州のオロンガポ市に向かった。バスでの移動中に見たオロンガポ市の町並みはマニラほど発展していないものの鮮やかで活気のある町に思えた。約2時間の移動でオロンガポ市支部に到着した。

オロンガポ市支部でもこれまでの支部訪問同様、青年ボランティアの紹介と支部内の見学をさせていただいた。こちらには187人のユースボランティアがいることを聞き、JRCでもそのボランティア精神を見習っていきたいと感じた。次に向かったのはオロンガポ市コミュニティーセンター、こちらではオロンガポ市の住民の方々が大勢で歓迎してくれた。3歳くらいの子供たちとそのお母さんもいた。子供たちには食事が提供されるということだ。また、そこでは野外の献血も行われていた。衛生的に大丈夫なのかとは思ったが、その場所に多くの人がボランティアで献血にきていて、それはすばらしいことだと思った。

昼食は「ペッパー・ランチ」というお店で支部職員のみなさん、元市長夫人キャサリンさんたちと食事をした。キャサリンさんはお孫さんとの約束

もある中、私たちを食事に誘ってくださったと知って、改めてフィリピンの人の優しさ、おもてなしの心を感じた。

オロンガポ市公立高校では多くの生徒がダンスで歓迎してくれた。この訪問が最後の学校訪問だったが、私たちは訪問後に最後だったということに気付いた。しかし、ダンス・絵描き歌・着付け・お茶・日本のことについての発表後に生徒たちから名刺やサインを求められるほどだった。また、みんなで「オジョオジョ」や「カンナムスタイル」のダンスを踊り、疲れたが楽しい時間を共有できた。

ホテルに戻ってからの夕食はホテルに隣接しているレストランでバタアン州支部のユースメンバー（RCY=日本でいう青年赤十字奉仕団）と食事会だった。みんなとてもフレンドリーすぐに仲良くなることができた。また、RCYのみんなは看護学生であった。どのテーブルも笑顔が絶えない素敵な食事会だった。



バタアンRCYメンバーと一緒に

訪問日誌

【5日目】8月14日(木) 天候: 晴れ 記録者: 小林 憲人

●日 程

- 8:30 朝食
- 8:50 バランガ公設市場見学
- 10:20 サマット山
- 12:30 「死の行進」0km地点見学
- 12:40 フрендシップタワー見学
- 14:10 バタアン原子力発電所見学
- 17:20 バタアン州支部訪問
- 19:20 夕食
- 21:20 ホテル着

●所 感

今日は朝食後、トライサイクルに乗りバランガ公設市場を見てきた。トライサイクルとはサイドカーがついた乗り物でフィリピンではタクシーの代わりとして使われているものだ。市場では買い物の途中で物乞いの子供に会った。私は、気持ちでは何かして助けたいと思っても、何もできなかった。このような子供がたくさんいるかもしれないということを考えると、簡単に何かをあげればそれで終わりという問題ではないと思ったからだ。

サマット山の山頂付近まではバスで移動し、その後階段を上り山頂へ行った。途中の博物館では戦争中に使われた武器や軍服などが展示してあった。サマット山を下りた後「バタアン死の行進」のスタート地点とされる「0km」地点に行った。「バタアン死の行進」とは第二次世界大戦時に日本人が、投降したアメリカ軍捕虜やフィリピン軍捕虜、民間人捕虜を収容所に移動させるとき十分

な食料や水をほとんど与えず約120kmを歩かせ、大勢の死亡者を出したことから呼ばれるようになったそうだ。日本人がこんなことをしているとは知らなかつたので、この話を聞いたときは心が痛んだ。また「0km」地点付近には「フレンドシップタワー」というタワーがあった。このタワーは第2次世界大戦の戦没者の冥福と平和の祈りを捧げるタワーで、私たちも祈りを捧げた。



「バタアン原発」内部の見学

バタアン原子力発電所では、始めに施設の説明を聞いてから、中を案内してもらった。内部は一度も稼働していないということで埃をかぶっている機器などもあったが予想以上にきれいで、私にはすぐにでも稼働できる状態に見えた。しかしこの原発は、チェルノブイリ原発事故、福島第一原発事故などにより稼働計画が中止となった。現在は見学（観光）のために使われている。私は、この原発が稼働すればフィリピンの人たちの電気代がもっと安くなるのにと思う反面、事故の可能性や核廃棄物の処理のことを考え稼働を中止した決断は正しかったのではと思った。

バタアン州支部では、昨日から付き添ってくれていた赤十字の方とお別れをした。（今日のバスの移動中睡魔に勝てず、お世話になった支部の方々との貴重な交流の機会を、充分にとれなかつたことを深く反省した。）



「バタアン死の行進」出発地点「0km」

訪問日誌

【6日目】8月15日(金) 天気: 晴れのち雨 記録者 川井 典恵、花見 涼

●日 程

- 7:30 朝食
- 8:20 ホテル近くのコンビニ（ファミマ）にて軽食購入
- 9:00 ホテル出発
- 10:25 プラスチックリサイクル工場（イラカ村）見学
- 10:50 ココヤシリサイクル施設（アルダナ村）見学
- 11:30 生ゴミリサイクル施設（パンプローナ村）見学
- 12:05 ウォーターリリーリサイクル施設見学
- 12:50 ラス・ピニャス市副支部長ヴィリアー（Villa）さんの自宅に招待され昼食
- 14:00 モールオブアジア（ショッピングモール）
- 19:07 Singing cooksでお別れパーティー

があることにより仕事が与えられるという点ではとても良いことだと思った。しかし、工場は臭いがとてもきつく、近くを流れる川は黒く汚染されていたので、公衆衛生の面では配慮が必要であると感じた。



リサイクルの説明を聞くメンバー

●所 感

この日フィリピンに来て初めて雨が降った。ラス・ピニャス市には4つのリサイクル施設があり、最初に行ったプラスチックのリサイクル施設では捨てられたペットボトルなどから学校のイスを作つてラス・ピニャス市内の貧しい学校に送っているとのことだ。いつかラス・ピニャス市以外の貧しい地域にも送れるようになればいいなと思った。リサイクル品の寄付とりサイクル工場

ココナツのリサイクル施設では中身を取った後のココナツの殻から肥料や斜面保護のネットを作っていた。特に斜面保護のネットは原料がココナツであるため山自体にも優しいとのことだ。ココヤシの生産量・消費量の多いフィリピンならではのリサイクル方法だと思った。

生ごみを回収して肥料にするキッチンウェストでは、パンプローナ村の住民から生ごみを集め7日間かけて肥料を作っていた。それ以外にもミミズを使った肥料も作っていた。生ゴミからできた肥料はとても原料が生ゴミとは思えないくらい悪臭を感じなかった。また施設のことを説明してくれたエリックさんは赤十字ボランティアの方でもあるらしく月に2、3回アルダナ村の人にゴミの分別に関するセミナーを開いていると聞き、私自身「人に教える」という活動も大切なボランティアだと学んだ。

ウォーターリリー（水仙のような植物）のリサイクル施設では、ウォーターリリーの大量発生に



リサイクルされたイスに座って

より川の流れが悪くなつて、環境に影響があつたため、ウォーターリリーを再利用できて良かったと思う。ウォーターリリーの編み込み作業などをしている人は女性で小さな子供も一緒にいたので、子育てをしながら女性が働く場であることがわかつた。

お別れ夕食会はコックや店員さんが歌つて踊るレストランで行われ、フィリピン滞在中お世話になった人たちとの最後の思い出となつた。バタアンで友達になつたマイケルとレオニエルがわざわざマニラまで来てくれて嬉しかつた。そしてなにより、フィリピンでずっと一緒だったジャンとの別れがとても寂しかつた。それでもたつた一週間

でこんなにも国境を越えて仲良くなれたのだと思うと寂しさ以上に私は嬉しかつた。また会いに来ようと思った。



ウォーターリリーで編み込み作業

【7日目】8月16日(土) 天気: フィリピン→晴れ 日本→雨・曇り、晴れ 記録者: 澤田 夏子

●日 程

6 : 40 ホテル発
7 : 20 空港到着
9 : 30 マニラ発
15 : 00 成田着
15 : 30 成田出発
18 : 50 いわき着
19 : 10 いわき発
20 : 10 郡山駅着
20 : 15 郡山発
21 : 15 福島県支部到着

●所 感

とても朝が早かったが、7日間ずっと一緒だったリンさんも空港まで来てくれた。7日間の滞在は長いようであつという間で、まだフィリピンにいたいという気持ちでいっぱいだった。空港でリンさんとお別れする際に、8人で協力して作った色紙を渡し、とても喜んでくれた。フィリピンを離れるのが余計に寂しくなった。無事、日本に到着し、バスの中ではお世話になった石田さん、富田さん、先生方にも色紙を渡し、フィリピン派遣の終わりを改めて実感した。



日本に到着後、バスの中で

「フィリピンへ行って学んだもの」

福島県立福島東高等学校 2年 西野剛生

実は私はフィリピンメンバーに会う度に自分だけ置いて行かれる気持ちになる。フィリピンに行く前も行った後も、もちろんフィリピン滞在中でもみんなが一步前を歩いていたように思える。それはなぜかというと自分よりもフィリピンや訪問する場所について広く深く調べていたり、訪問先で説明を受ける際も地名、人の名前、数量などを事細かにメモしたりしていたからだ。それに対して私は普段から学校の課題に提出日ギリギリまで手を付けなかったり、朝電車に乗り遅れたりすることが多い。フィリピンに行ってからも朝寝坊したり、出発前に完成させておくべきだった英文が残っていたりして反省することがあった。だからみんなを見ていて先見の重要性を身に染みて感じた。それ以外にも滞在中夜12時を既に過ぎていても各自でその日の出来事をしっかりとまとめていた。たとえ眠く、疲れていても日誌を最後の1行まで書くみんなの姿は自分の励みになっていたことを思い出す。

また、最貧の地で生まれても必死に家族のために働いていた子供たち。中でもパヤタスで出会った女の子は、「学校が少なく先生が足りない状況



お抹茶のお点前は？

の中で十分な教育を受けることのできない子供たちのために私はこの地で先生になりたい」と言っていた。自分の生活もままならないからこそ家族や地元の子供たちのことを大事に考えられるのだと思った。中途半端に大学の志望校を決めていた自分にとって彼女の姿は誰よりも輝いて見えた。

そして、自分とは違ったものの見方や考え方をメンバーや先生方に教えていただき、そこにも新しい発見があり複合的な「学び」が出来たのだと思っている。この派遣で得たものは“フィリピンでの活動”だけでなく“一緒に行った同志”がいたからこそその「学び」だったと思っている。この派遣の成功の理由の根底にはメンバーや先生方、日本赤十字社福島県支部のみなさん、そしてフィリピンの方々の支えにあると私は考える。このような素晴らしい機会を福島の高校生に与えてくれた日本赤十字社福島県支部の方々や一緒に活動した仲間にたいへん感謝している。



1日目 同志メンバーと

派遣報告

学校法人福島成蹊学園福島成蹊高等学校 2年 澤田夏子

2014年8月10日、私は期待と不安を胸にフィリピンへと飛び立った。私のフィリピンに対する印象は、“貧困”そして2013年に起きた大きな“台風”的ふたつであった。そんなフィリピンに到着してまず感じたことが、独特なフルーティーな匂いがするということだった。また、気候は蒸し暑く、日本の夏、もしかすると日本より暑いのではと感じた。

フィリピンでは、赤十字本社や支部訪問、学校訪問、パヤタス訪問、史跡見学、バタアン原発見学、リサイクル施設見学、青年赤十字ボランティアの方々との交流などを行った。

フィリピン赤十字本社や、それぞれの支部への訪問ではフィリピン赤十字の活動や、台風の時のことなどをスライドで説明してくださった。建物内を見学し、血液センターや日本が寄付した災害時に使う機材などを積んだ車も見ることができた。私たちのために親身になって案内、説明していただき勉強になることがたくさんあった。

それぞれの学校訪問では、どこの学校も盛大に歓迎してくれてとても嬉しくなり、不安が少しなくなった。お互いに準備したものを発表し合い、フィリピンの文化に触れることができ、また私たちも日本について、福島について伝えるとても良い機会であった。発表自体は、1回目での反省点を2回目以降で生かせるようにみんなで協力し、試行錯誤を重ね、よりよい発表ができた。学生さんはみんな積極的に話しかけてくれて嬉しかったが、英語をほとんど理解することができずとても悔しい思いをした。しかし、お互い笑顔を交わし、アイコンタクトをするだけでも十分、コミュニケーションになったのではないかと思った。

3日目に訪問したソルトパヤタスは、私が一番印象に残ったところだった。職員の方からパヤタスや、スマーキーマウンテンについての説明を受け、パヤタスに人が移住してきた経緯、ごみ山ができる経緯など詳しく知ることができた。スタディーツアーでは、パヤタスの街を現地の方と一緒に歩き、パヤタスに住んでいるLenieちゃんの家庭を訪問し、生い立ちや生活についてのお話を聞いた。それは私の印象にあるもの、想像していたものに近いものだったが、衝撃や心に伝わるものは大きかった。世界には、毎日十分な食べ物を食べることができず、しっかりとした家がなく、狭いところに大人数で生活するという、経済的にも精神的にも苦しい生活をしている人がたくさんいることは知っていた。想像通りであっても、私の心はその想像通りである現実についていくことができなかった。実際に自分の目で見て、聞いて、感じる事と想像では、全く感情が違うのだと知った。同じ地球に住んでいて、同じ人間でも、生まれた環境が違うだけでこんなにも大きな差が生まれてしまうのだと実感した。家族がいて、家があり、綺麗な服を着て、3食ごはんを食べることができ、学校に通い勉強ができる。当たり前だと思っている何気ないことが、とても恵まれていること、幸せなことであると心から思った。そして、苦しい生活を送っている人のために私に何かできることは何か、力になりたいという気持ちが込み上げてきた。このスタディーツアーでご一緒した現地の方と考えや、お互いの国の現状を共有することで、理解が深まり、大きな事実を知ることができ、とても貴重な時間を過ごすことができた。

史跡見学では、サマット山や「死の行進」につ

フィリピンを訪問して(派遣団員所感)

いてなど、フィリピンの歴史について深く知ることができた。バタアン原発では原発の中を見学し、規模の大きさにおどろいた。また、詳しい説明で原発についての理解を深めることができた。

リサイクル施設見学では、プラスチック・ココナツ・生ごみ・ウォーターリリー（すいせん）の4つを見た。プラスチックは川のごみを利用し、椅子を作り、貧しい学校に寄付するといっていた。ココナツではひもを作り、山崩れ防止のネットを作っていた。このネットは3年でごみとなるが、その後肥料として自然に返される、とてもエコなネットだ。ここでは、障がい者の方も働いており、そのような方でも働ける場があることはとてもいいことであると思った。生ごみは肥料として使われる。ウォーターリリーは、最初は扱うのが大変な植物だと思われていたそうだが、今はござ・バッグ・スリッパなどの実用的なものにリサイクルされている。このように様々なごみを色々なものにリサイクルしているのを見て、ごみの山のごみも、リサイクルを活用して無くしていくことができるのではないかと思った。

青年赤十字の方とはほとんど毎日一緒に活動した。最初はなかなかコミュニケーションをとることが出来なかつたが、日が経つごとにたくさんお話しすることが出来るようになっていた。上手な英語を使って話すことはできなかつたが、笑顔と身振り手振りで意思疎通ができ、心が通じ合えたことにとても大きな喜びと、言葉の違いがあつても人と関わることは楽しいことだと感じた。しかし、英語を理解し、うまく話せなかつたことに悔いが残つた。私は将来、英語を使った職業や、外国人との交流についての興味がわき、将来のためにもっと英語の勉強をしていこうという決意ができ

た。この派遣で数え切れないほどの貴重な体験ができ、学んだこともたくさんあり、フィリピンに対する思いや印象は、派遣前と後では大きく変わり日本に帰つてからもフィリピンを気に掛ける回数が自然と増えた。ここで感じた想いをたくさんの人々に伝え、フィリピンについてもっと知つてもらいたい。この派遣で私は、日本とフィリピンを繋ぐ架け橋のような存在になることが出来たと感じている。フィリピンで学んだこと、感じたことを胸に、これからもJRCの一員としてはもちろん、一人の人間として、国際的に活躍できるよう、日々生活していきたい。



バタサン・ヒルズ公立高校にて

フィリピンで学び考えたこと

福島県立安積高等学校 2年 鬼頭朋加

私がフィリピン派遣に参加した理由に、国際化が進む世界で、生まれ育った環境も、使っている言葉も、習慣も、風土も違う人間が集まった時に私たちは本当に気持ちを伝え合い、協力できるのかが知りたかったことと、日本から出したことのない自分の世界を広げ、もっと大きな視野で物事を考えられる人間になりたかったからの二つがある。初めての海外渡航、しかも観光では決して会って話す事が無かつただろう人たちと話すことが出来たことは、私を大きく成長させてくれたと思う。



1日目 本社にて福島のことを伝えました

フィリピンで人と会ったら積極的に話すように心がけていたが、普段から人に話しかけるのが苦手なため、そして英語が苦手なため不安が大きかった。しかし、フィリピンの人が積極的に話しかけてくれたこともあって、自分でも驚くほど話すことができた。また、これは私がフィリピンを訪れて驚いたことでもある。私がフィリピンで会った人々は、私たちがタガログ語どころか英語も上手に扱えない事をわかっても、私達に話しかけてくれる人が多かった。日本人は外国語に苦手意識を持っている人も多く、日本語以外の言葉

で話すことを避けている。この違いは、日本国内に住むひとのほぼ全員が日本語を話し、一方フィリピンでは同じ大マニラ市内でも北と南で違う言葉を話している事に一因があると私は思った。

そしてフィリピンの子ども達はいつでも笑顔である。私たちは交流事業の一環として、フィリピンの学校を訪ねた。そこではフィリピンに伝わるバンブーダンスやガラスのコップを頭や手のひらにのせて踊る踊りを見せてもらった。その先生に「うちの生徒は私が怒っても笑っているのに、あなた方は笑顔が足りません。もっと笑いましょう。」とこれまた素晴らしい笑顔で言われた。私はフィリピン滞在中常に笑顔を心がけていたが、まだまだ足りなかったようだ。私は笑顔とは世界共通の意志伝達方法であると考えている。私はフィリピン派遣でこれらのこと学んだ。そして私たち日本人は、日本国内ではなく、世界中の人々と意見を交換でき、協力出来るこの時代に、言葉の力に頼るだけではない事も学んでいかなくてはならないと感じた。

私はフィリピン派遣メンバーの生徒リーダーとしてこの派遣に臨んだ。JRCとしてメンバーの生徒全員がリーダーとして活動する事を目標としていたため、私がほかのメンバーと違っていたのは挨拶をする機会が多くなったくらいであっただろう。だが、今回の派遣での自分の行動は、フィリピン派遣への参加、そしてリーダーとしての役割を自分から望んだ身としてはふさわしくないものも多く、そのことを反省している。特に、一日目の学校訪問で発表の時に準備不足で自分たちの思う通りにできなかったことは、フィリピンから帰ってきた今でも悔しく、明らかな準備不足で

○フィリピンを訪問して(派遣団員所感)

あったことが申し訳なかった。また、タイトなスケジュールの中で時間に遅れてしまったことがあったのには、JRCとしての先見の力が足りなかつたと後悔している。

このフィリピン派遣で私はたくさんの人と出会い、日常生活では経験できないことをたくさん体験した。初めて会った大勢の人とも話し、そこから多くの事を学んだ。この経験は私のこれから考え方、そして生活の仕方に大きな影響を与えた

ていくだろう。この事業に参加できて本当に嬉しく思う。



2日目 ラカン・ディユラ高校での報告



「フィリピン派遣で感じたこと」

福島県立あさか開成高等学校 1年 新田 優花

私は、今回の派遣で貧富の差の問題について考えるべきことがたくさんあると感じた。

三日目にパヤタス地区を訪れた。その地区に入ると、マニラなどの高層ビルが立ち並ぶ都市部などとは全く違う景色が見られた。強風で崩れてもおかしくない家々や、清潔とは言えない衣服を身にまとっている人、そんな人たちが怖い目つきで私たちの乗っているバスを見ているように感じた。そして、バスから降りた瞬間、独特で鼻につくような臭いがしたのに驚くとともに、スマーキーマウンテンの近くに住む人々は過酷な状況にあるのだろうと思った。そんな過酷な状況にある、スマーキーマウンテンの近くに住む人々であったが、リカ (LIKHA) センターで出会ったスタッフやそこにいた子供たちなどは、みんな笑顔で私たちを迎えてくれた。パヤタスの一部にあるスマーキーマウンテンはゴミが積み上げられており、それはまるでフィリピンの貧困の問題の大きさを物語っているかのようだった。そして、このスマーキーマウンテンが作られたのはゴミを燃やしてはいけないという、国の方針のためだったの

だ。2000年には、このスマーキーマウンテンの大崩落が起きて多くの人がゴミの下敷きになって亡くなってしまった。こんなに危険なものを、國の方針を変えてでもなくしたほうがよいと思ったが、このようなスマーキーマウンテンがあるおかげで、ゴミを拾ってそれを換金する「スカベンジャー」という職に就き、決して裕福とは言えないが程度の生活を営めている人がたくさんいるという現状を知った。

私がパヤタス地区で訪れた、ジェサちゃんのお家では、朝ごはんは砂糖をたくさん入れた甘いコーヒーたった1杯で、昼・夕食は家族13人でお魚とご飯を分け合っているというのを聞いた。彼らは、とても貧しい状況にあるがみんなで支えあって生きているのに感動した。危険の中で生きなければならないという現状を改善して、安定した仕事ができる状況を作らなければならぬと強く思った。

そしてまた、バランガ公設市場に行ったとき私の腕をトントンと叩いて「何か下さい」と訴える男の子がいた。かわいそうで何かあげたいという

○フィリピンを訪問して(派遣団員所感)

気持ちはあったが、何もできなく苦しかった。移動中のバスでは、道路に服を着ていない裸の小さな男の子が、私たちの後ろを走っている車をドンドン叩いて乗せてと訴えていたのを見た。一日中、あの男の子の姿が頭に離れないほど、胸が痛かった。

パヤタス地区などの貧困地域とは対照的に、六日目にラス・ピニヤス市支部の支部長さんのお宅に伺ったが、メイドさんがいるとても裕福な家であった。また、フィリピンには世界で2番目に大きなショッピングモールがあり、店内はたいへん広く物にあふれていた。

このようにフィリピンは貧富の差がとても激しい国だ。貧富の差をなくすといつても、この差を埋めることはとても難しいだろう。だが、この問題から私たちは目をそらしてはいけない。まずは、

自分ができるボランティアや募金から始めたいと思った。今回、フィリピン派遣を通して貧困の問題を身近に感じることができた。今回学んだことを、学校や周囲の人たちにしっかり正しい情報として伝えていきたい。実際のフィリピンの現状を伝え、貧富の差について考える機会を作りたい。そのためにJRCで一円玉募金などの新しい取り組みにも挑戦していきたい。また、積極的に募金活動などに携わり、貧困の人たちを助けたい。そして少しでもフィリピンの貧富の差が縮まり、たくさんの子供たちが学校に行くことができて、ご飯をきちんと食べることができ、仕事があって、スマーキーマウンテンに怯えながらの生活ではなく、安心して暮らせるような環境作りのために自分ができることを始めていきたい、と考えている。



リカセンターでスタッフや子どもたちと一緒に

「フィリピン派遣を通して」

福島県立白河旭高等学校 3年 川井典恵

7日間のフィリピン派遣は毎日が新しいことばかりで、嬉しかったこと、楽しかったこと、悲しかったこと、もどかしかったことなどたくさん想いのつまった日々だった。

私たちが泊まっていたホテルはたいへんきれいなホテルで、ホテルの近くにも大きなデパートがあるなど、とても発展している地域のように思えた。しかし、バスで10分ほどの場所には貧困地域があり、フィリピンの貧富の差は明らかだった。また、バランガの市場に行ったとき、私は背中をトントンとされ、後ろを振り向くと10歳くらいの男の子が私に手を差し出して「何かちょうどいい」と訴えかけてきた。私はどうすればいいかわからずにはいると、警備員がきたため男の子は逃げていってしまった。私は初めてのことでの戸惑ったのと同時に、子供が物乞いをしなくてはならないという現実を見て悲しく思った。その時その男の子に何か食べるものをあげればよかったと後悔した。



フレンドシップタワーの前で

また、第二次世界大戦で日本とフィリピンの激戦地であるサマット山や、「死の行進」が始まった場所である「0km」、そして「フレンドシップタワー」にフィリピンの学生たちと一緒に訪れたことで、昔は敵対し合っていた日本人とフィリピン人が、今は会話を笑いあって、楽しく同じ空間を共有していることが本当に驚くべきことであると感じた。私たちは先祖同士が戦争をしていたなんて信じられないほど互いを尊重し合い、打ち解けて過ごすことができた。戦後、何年もかけて築かれたこの絆がずっと続いていることを思ってほしいと思った。

そして、わたしが今回のフィリピン派遣の中で最も印象に残り、嬉しかったことは、RYC（日本でいう青年奉仕団）のフランシスコさんの「言葉は通じなくても、あなたたちの笑顔を見ていれば気持ちは伝わるよ。」という一言だった。英語でのコミュニケーションに自信のなかった私はこの言葉がとても嬉しかった。そして外国人とのコミュニケーションの時に、言葉は通じなくても表情やジェスチャーで伝えようとする意志が大切であると感じた。

この充実した7日間のなかで、日本ではできない貴重な体験が出来て、そしてこの派遣でたくさんの人に出会えて本当に良かったと思う。国境も言葉の壁も超えた友情があり、フィリピンを離れみんなに会えなくなるのがとても寂しかった。いつか、夢をかなえ、自分自身成長したら、またフィリピンを訪れて、フィリピンで出会った人たちに会いに行きたい。そして何より、私たちフィリピン派遣メンバーには日本とフィリピンの懸け橋となる義務があると思う。今後多くの人に今回のフィリピン派遣で学んだことを知ってもらいたい

○フィリピンを訪問して(派遣団員所感)

い。そして、自分の将来にも生かしていきたい。

最後に、一緒に頑張ってきたフィリピン派遣メンバー、派遣がより良いものになるよう指導してくださった先生方、フィリピン滞在を支えてくれ

たリンさん、いつも笑顔で一緒にいてくれたフィリピン赤十字のジャン、フィリピンで出会った方々、このような機会をくださった日赤福島県支部の方々、本当にありがとうございました。



「フィリピンで学んだこと」

福島県立喜多方桐桜高等学校 情報システム科 2年 花 見 涼

先生や他校のJRCの先輩に勧められたこと、県役員になったことから、私はこのフィリピン派遣に興味を持ち参加した。7日間フィリピンで過ごした日々は私の世界観を大きく変えてくれた。私はもともと英語が苦手だったので、この派遣に選ばれた時は心底嬉しかった半面、コミュニケーションが不安でもあった。それでもこの派遣に参加する県役員も会津地区JRCメンバーも私一人だったので「福島県の代表の一人として必ず福島の現状を伝えねばならない」という思いを胸に秘め8月10日、日本を旅立った。現地に着いた時の最初の印象は日本と比べると道路付近の排気ガスが凄まじいということだった。福島は比較的田舎なので慣れていないだけかとも思ったが、日中でも道路は砂煙のように曇っていた。11日に訪れたフィリピン赤十字（PRC）本社ではきちんと自己紹介出来るのかがとても不安だったが、事前研修の甲斐もありなんとか話すことが出来た。自己紹介の後にはフィリピンでの台風被害について説明していただき、私達団員の質問は通訳のリンさんが伝えてくださり、貴重な意見交換ができたと思う。この日には最初の学校訪問があり、生徒たちは私たちを本当に歓迎してくれた。この日以降の訪問も合わせて計3回の訪問があったのだが、どの学校に行ってもそれは変わらない。学校には常にフィリピンの生徒たちの笑顔と笑い声があつ

た。そしてどこの学校でも生徒たちがダンスや歌などのパフォーマンスをしてくれた。私たちもプレゼンテーション、ダンス、お茶、着付け、絵描き歌を披露するのだが正直最初の訪問では良い発表が出来たとは言えなかった。先生方からのアドバイスをもとに再度構成を練り直し、その甲斐もあって2回目以降の訪問では団員みんなが納得できる発表ができたと思う。私がフィリピンで一番印象に残ったのは12日に訪れたパヤタスだ。最初の印象は臭いだ。ゴミ山の付近にあることもあってパヤタスは少し独特の臭いがした。パヤタスではゴミ山でのゴミ拾いを主な収入源としている人もいて、収入が少ない中で困難な生活をしている人が大勢いた。私はジェサという女の子の家庭を訪問したのだが、そこでも収入源はゴミ拾いとジェサの奨学金ということだった。最初ここに来たときに、私はパヤタスが「希望の地」と呼ばれていることを聞いた。正直私には信じられなかつたのだが、それを理解したのは訪問から戻る途中



フィリピン赤十字本社の方々との昼食会場にて

フィリピンを訪問して(派遣団員所感)

の道を歩いていた時のことだ。道端には屋台が建ち並んでいたのである。貧困地域であることは知っていたが、私の印象ではもっと苦しい、食べるもののすらほとんどないというものだったのだ。しかし、実際は違った。確かに貧困など様々な問題を抱えているもののパヤタスには沢山の屋台と人々の笑顔があったのだ。この時に私が重大な勘違いをしていてこと、パヤタスが「希望の地」と呼ばれている意味を知ったのである。ソルトで最後の意見交換の場が設けられた時に、ジェサが自分の夢が「歌手」になることだと教えてくれた。私たちJRCはジェサの様に貧困地域でも夢を持って生きている人々に何か出来ることはないのだろうか、と改めて考えさせられた。私はこの派遣前

に事前学習があったものの、フィリピンのことを全然知らなかったのである。報道やネットで見る貧困に関するることは、ほんの一端に過ぎなかったのだ。貧困の中にも夢を捨てず毎日を笑顔で過ごす人々もいたのだということを私は本当に嬉しく思った。同時に私たちJRCはこれからフィリピンのみならず、貧困の中で暮らす人々に何をしてあげられるのかを考え、より一層JRC活動を発進させていかねばならないと強く思った。このフィリピン派遣の報告を第一歩に福島JRCを始めとして日本の赤十字活動が発進していくよう、この派遣に参加させていただいた私たちが、先頭に立って福島JRCを引っ張っていけるように努めていきたいと強く思う。



「フィリピンでの7日間」

福島県立勿来工業高等学校 電気科 2年 小林憲人

私がフィリピンと聞いてイメージしたことは、バナナが有名だということ、発展途上国だということ、台風の被害が多いということぐらいでした。しかし、実際に見てみると首都マニラは日本の首都に似ており高層ビルや立派な建物が並んでいて、自分の抱いていたイメージほど悪い印象は受けませんでした。ただ、道路はきれいにアスファルトで舗装されていましたが、日本の道路のように振動が少ない道路ではありませんでした。それでも私の第一印象はきれいな町だと思いました。しかし、首都を抜けるとその印象は崩れ、移動中のバスの窓から見える人々は首都の物とは全く異なっていました。首都に建設された家はどれもしっかりと建てられていて日本の建物と変わりないような家でしたが、地方で車窓から見えてきたのは立派な建物ではなく、トタンだけで作ら

れた家や、コンクリートブロックをただ積み上げて屋根にトタンをかぶせただけの家でした。台風が接近、上陸したときの突風や大雨にはとても耐えられそうにない家でした。日本でこのような建物は見たことがなかったので貧富の差がとても大きいことを実感しました。

2日目以降はフィリピンの赤十字社を訪問したり学校を訪問したりと毎日が忙しく大変な思いもしましたが、学ぶことも多くありました。フィリピンの赤十字では日本とは異なる活動をしているという説明があり、その活動についてとても興味を持ちました。また、説明の中で、赤十字の活動にボランティアが積極的に参加しているということを聞き、素晴らしいことだと思いました。学校訪問は3校行きましたが、どの学校でも生徒がダンスを踊って見せてくれたり、音楽を演奏した

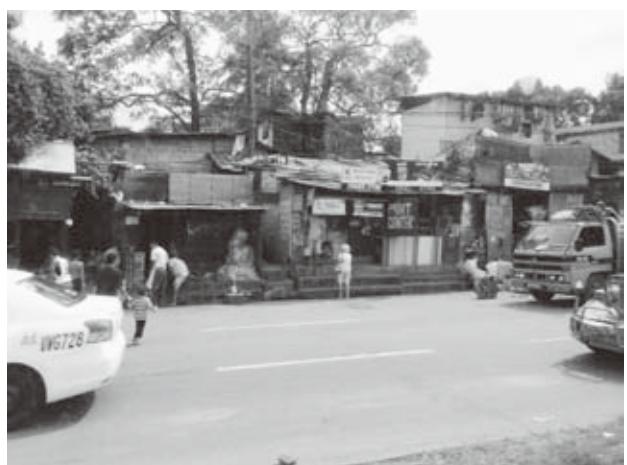
○フィリピンを訪問して(派遣団員所感)

り、歌ってくれたりと素晴らしい歓迎をしてくれとてもうれしくなりました。私たちも各学校で日本についてのプレゼンテーションやダンスを披露してきましたが、1つ目の学校では緊張もあったのか、みんなの声が小さかったり若干のハプニングもあったりもしました。しかし2つ目の学校からはホテルで練習をしたおかげで1日目よりもよい発表をすることができました。発表の後の少しの時間や休憩時間には積極的に話をしてくれたのですが、英語が苦手だったのでコミュニケーションを取りたくても、何を聞かれているのか分からず苦労しました。一緒に行ったメンバーに「何を話しているの?」と通訳を頼んだり、電子辞書で調べたり、身振り手振りでなんとか聞かれている質問には答えたものの、自分の英語力の無さを痛感し、英会話の力をもっとつけたいと思いました。

7日間の滞在で私が最も印象に残っているのはパヤタスのゴミ山でした。ゴミ山は想像以上に大きく、あたりはそのゴミによる異臭が立ち込めつい鼻を押さえてしまいそうな場所でした。しかしここで生活をしている人々はおいなど気にしている様子もなく、普通に生活をしていました。私の個人的な考えとしては衛生面を考えてゴミ山をなくしてその土地に新しく家を作るなり働く場所を作るなりしたほうがいいのではないかと思いました。しかしその家や働く施設を作っている間、一部の人たちの収入源はなくなります。なぜなら彼らの収入源はゴミ山からまだ使えそうな物を拾ってきてそれを売ることだからです。しかし、これはパヤタスに住んでいる人全員が行っていることではありません。安い賃金でも作業員として、メイドとして、働いている人たちも中にはいます。働きたくても働けないパヤタスの人にとってゴミ山は生計を立てていくうえで必要なものになってしまっています。この説明を聞いたとき私

は驚きでいっぱいでした。説明後、現地の家庭を訪問する機会がありました。私が行った家庭では母親がメイドとして働いているのでゴミ山に行くことはほとんどないという話を聞きました。しかし賃金が安いためコーヒー1杯が朝ごはんの代わりになることもあるということでした。話を聞いていると毎日の生活は安定しておらず、いつもギリギリの生活をしているということを知りました。パヤタス訪問後、私はゴミ山の問題について何度か考えてみましたが、あの大量のゴミを処分するには国の協力と多くの時間が必要だという答えしか出できませんでした。ここで私は何か力になれることはないかと考えましたが、自分1人の力ではできることに限りがあることを思い知り、せめてこのフィリピンの現状を自分のできる範囲で周りの人々に伝えていかなければと思いました。

この派遣の目的には国際理解という項目がありますが、私はこの派遣でなければ学べなかつたことをもっと多くの人に知ってもらうため学校や地域の人々に広める活動をしていきたいと思います。



所得の低い住民の住居の様子

フィリピン派遣に参加して

学校法人山崎学園福島県磐城第一高等学校 2年 佐川愛実

8月10日～16日の7日間、フィリピン派遣に參加した。JRC委員会に入りフィリピン派遣があることに興味を持ち始め、いつかこの事業に參加したいと思っていた。そして今年の夏、2年越しの夢が叶い期待と不安を胸に日本を飛び立った。あっという間であったこの7日間は未体験なことばかりで、すべてのことが目新しかった。

市場で買い物をしている時、小さな手で背中を叩かれたような気がした。振り返ると男の子は手を出しお金を要求してきた。すぐにはNOと言えず、苦笑いで誤魔化していたが、ずっと離れて行かなかったためきっぱりNOと言うと別の人へと向かって行った。何かしてあげたい気持ちでいっぱいだったが、何もしてあげることができず心が痛んだ。帰国した今でもあの男の子の顔を思い出すと、やはり何かできなかっただろうかと考えて後悔する時も少なくはない。

6日に訪問した4つのリサイクル施設で最も印象的だったのはココナツのリサイクル施設だ。ゴミとなったココナツを捨てず集めることで周囲が綺麗になる。その上、仕事の増加に繋がり、職に就ける一連の流れに私自身とても納得をした。ゴミをそのまま捨てることなく、お金に変える考え方は日本ではなくフィリピン独特の方法である思った。

今回の派遣中3つの学校を訪問した。楽器を使っての演奏・ダンスなど工夫した形で私たちの到着を盛大に歓迎してくれた。私たちからは日本の文化を紹介するため、着付けとお茶立てを披露した。お茶立てはとても珍しがられみんな興味を示していたが、フィリピンではレモンティーのような甘い飲み物を好んで飲んでいるため、立てた

お茶を実際に飲んでもらうと渋みがあるせいかどの子も苦そうな顔をしていたのが印象的であった。最初の訪問先で交流発表が上手く行かずいくつかの反省点を残す結果となってしまった。その日のホテルで打ち合わせを開き改善点を見つけることで、訪問を重ねるたび納得のいく発表が出来た。

7日間の中で現地の学生と交流を深めるなど楽しいひと時もあれば、受け止めなければならない現実もあった。それは3日目に訪問したソルトパヤタスだ。人々が生活している背景には、大きなスモーキーマウンテンがあり衛生的にも環境が整っているとは言えなかった。私たちは何気なく毎日を過ごしているが世界に目を向けてみると、明日がみえないまま今日を必死で生きようとする人がいることも事実である。衣食住が整っており、不便なく生きられる環境は決して当たり前でないと実感した。

今回フィリピン派遣に参加し実際にやってみなければ分からぬこと、イメージのままのフィリピンで終わらせることなく、この派遣を無事に終えられた。



ケソン市支部のスタッフと共に

フィリピンを訪問して（派遣団員所感）

私自身、大きく変わったことがある。それは価値観だ。道と道の間に生活のスペースを設け、狭い空間で暮らす人々。トタンで組み立てただけのよう雨風をしのげるような頑丈な建物ではなかった。そこには大人だけでなく、外を裸足で駆け回る子供の姿もあり危険と隣合わせだった。決して日本では見ることのない光景を毎日のように目の当たりにした。貧富の差を感じると同時に世界観も変わった。

今回の派遣を終えて、フィリピンの台風被害や貧困地域などの問題を多くの人に伝える責任があると改めて認識した。これらの問題を派遣メンバーだけで解決することは難しく、不可能に近いのではないだろうか。だから何もできない、と言うわけでなく直接身をもって体験してきたことを伝えていくことが大切だと思う。私たちは小さことしかできないかもしれないが、これからも伝え続けていきたい。



フィリピン派遣の引率を終えて

福島県立福島東高等学校 青少年赤十字顧問 日下 淑子

〈フィリピン派遣準備〉

8月10日～16日まで、「平成26年度青少年赤十字国際交流事業フィリピン派遣」に参加した。春の県大会に偶然、ほとんどの派遣予定生徒が参加していたため、例年より早く初顔合わせをすることができた。その際、第一回の事前研修までに、各自の参加理由をまとめておいてもらいたいこと、できれば研究テーマも設定してもらいたいことをお願いした。これは、昨年度の派遣事業に参加された先生からのアドバイスによるものだった。パスポートなどの手続き関係や予防接種などの準備等で忙しくなることが予想される中、事前研修は2回しか持てないため、早めの行動を促すことが大切である。これによって、わずかでも生徒たちの負担を軽減し、よりよい交流をすることにもつながるだろうという経験者ならではのありがたい提案であった。

事前研修は予定通り2回実施された。1回目にフィリピン派遣の目的や今年度の訪問予定地を含めた日程の説明を受けた後、さっそく交流プログラムの相談に入った。2回目には準備物もほぼ整

い、披露するダンスの練習などの具体的なところまで準備を進めることができていた。参加生徒達自身の努力、互いに励まし合う協力体制を作り上げてくれたことを嬉しく感じた。同時に、県TCや地区TCの機会に、先生方から様々な形でお力添えをいただいたことや、青少年赤十字の生徒さんたちからの協力を思い出し、感謝せずにいるわけではなかった。

〈フィリピン赤十字本社の訪問〉

今回の派遣では、フィリピン赤十字本社と支部四カ所（マニラ支部、ケソン市支部、オロンガボ市支部、バタアン支部）、公立高校3校を訪問した。最初に訪問したのは、フィリピン赤十字本社である。最初にvice chairman（通訳のリンさんも、ニアマンと表現されていた。副代表または議長代理なのだろうか）のミゲル氏からの歓迎の挨拶があった。挨拶の中で、東日本大震災時のフィリピン赤十字本社からの物資や人の支援について説明があった。「世界各国から支援があったと思うが、私たちフィリピンも、貧しい国なので

○フィリピンを訪問して(派遣団員所感)

少しではあったが、支援を行った。チアマンのゴードンも、復興支援の会議に出席した。日本は私たちの心の近くにあると思っているので」と述べてくださったことが心に響いた。

震災時におよそ100名の救助隊と、カップ麺などの支援物資をフィリピンからいただいたことは頭の中にあった。しかし、実際にフィリピンを訪れてみて、高層ビルや高級ホテル、大きなデパートの目立つメトロマニラに驚く一方で、少し離れると「カメラや携帯を出してはいけない」「子どもにねだられてもお金を渡してはいけない」と注意を受けるような地域に入る。全体として見れば、決して豊かな国ではない。支援額の多寡ではなく、支援しようと思い、行動に移してくださるその心が素直に嬉しかった。

その後、昨年の台風「ヨランダ」による被害、救急救命や災害救助の様子と、現在の復興状況についてパワーポイントを用いて丁寧に説明していただいた。画面を見ながら、語学力があればもっとよく理解できるのだろうとは思ったが、リンさんが適宣言葉を添えてくださったのはありがたかった。生徒達からも、災害時の行方不明者の捜索期間や、ストリートチルドレンの数の把握、台



フィリピン本社での救助車の説明

風対策などに関して多数の質問が出た。最初の訪問箇所で緊張感もあったと思うが、事前にフィリ

ピンに関して勉強していた成果なのか、しっかりと理解して意欲的に学ぼうとする姿勢は頼もしかった。

本社の敷地内に災害時に使用する用具が積まれている特殊車両や、水陸両用車、消防車、救急車



フィリピンRCYの方々と日本食での交流です

等があり、一つ一つ説明しながら見せてくださった。特殊車両には、建物の下敷きになった人を助け出すための強力なジャッキ、ロープや工具などがヘルメットとともに積み込まれていた。外はたいへん暑く、じっとしていても日差しが肌に痛く感じられるような日だったが、そのような中にもかかわらず、シャツに汗をにじませながら一生懸命に説明してくださった。日本からもらった車両ですよとの言葉によく見ると、消防車には「制御電源」「液量計」など、日本語表示があった。「たいへん優れた車で、役にたっているが、何に使うか分からぬスイッチもあり、残念だ」「分かるものがあれば訳してもらえないか」ということだったが、専門用語でもあり、通訳のリンさんでも難しいようだった。

ニールさん、ジャンさんの案内で、本社の建物内も見せていただいた。24時間体制で災害情報を収集し対処するオペレーションセンターや、血液センターの見学をした。血液センターには、昨年

○フィリピンを訪問して(派遣団員所感)

の派遣メンバーがお世話になったというシャロンさんも待っていてくださり、リンさんも懐かしげに言葉をかわしていた。

その後、マックスズというレストランで昼食となった。市内で一番古くからあるチキン料理の店だということを後から知った。本社の方々とぜひ一緒に食事を、とのことで、席を用意してくださっていたようだった。ところが、本社の方々がなかなかお見えにならない。仕事の都合で遅れるとのことだった。リンさんが「ごめんなさいね、でもみなさんすごく忙しいから」とたびたび気にかけてくださった。実際、その後の夕食会や支部訪問でも、時間通りに予定が進むことはまず無く、前日に打ち合わせてあっても、急に連絡が入って訪問することになったり、夕食会になったりすることがしょっちゅうだった。時間どおりに動くということを日本ほどは重要視していないのだということもあるだろう。ただ、そればかりではないように感じられた。

実際にお会いしてお話をうかがうと、この後オフィスに戻って夜中まで仕事をするとか、人と会う予定があるとか、大変忙しい日常の業務の間を縫って私たちに会う予定を入れてくださっていることが感じられた。物理的には、私たちのために割けるような時間がないところを、かなり無理をしてひねり出してくださっているのだと思う。フィリピン市街地のすさまじい渋滞が、少ない時間をより一層削り取ってしまうという状況の中で、である。派遣前に先生方から伺ってはいたが、本当に心からのもてなしと、満面の笑顔での大歓迎を受けた。それは、まるで久しぶりに会う古い友人を迎えるかのような歓迎ぶりであった。

後日、暗くなる頃にバタアン支部訪問となったときも、予定外にホテル近くでの夕食会まで設定されていた。おかげで生徒達も若いボランティア



素敵なダンス（民族舞踊）

の方々と楽しく過ごすことができ、交流を図ることができた。また、翌日のサマット山、バタアン原発見学が終わるまで、支部の方々が随行してくださり、カラマイ（ココナツミルクで味付けしたライスピディング）や、ガビ（タロイモ）のソフトクリームなど、所々で疲れをいやすようなおやつまで用意してくださった。17時半頃、バタアン支部で、支部の方々とお別れするときには、別れがたく、寂しい思いであった。生徒達も、メールアドレスの交換などをして、別れを惜しむほど、交流を深めていた。

〈学校訪問〉

ラカン・デュラ公立高校、バタサンヒルズ公立高校、オロンガポ市公立高校の3校を訪問した。どの学校でも大歓迎を受け、歓迎プログラムもそれぞれに工夫がこらされていた。

互いの国歌齊唱に始まり、フィリピン側からは民族衣装を身につけた舞踊、歌の披露があった。お返しに生徒達も福島の紹介、浴衣の着付け、茶道、ドラえもん絵描き歌、AKBのダンスなど、日本の伝統文化から現代の若者文化まで紹介しな

フィリピンを訪問して(派遣団員所感)

がら交流を図った。3校目では、生徒達もだいぶ慣れ、フィリピンの高校生たちの間に入って一緒に踊るようなプログラムにも笑顔で参加することができていた。日本では、初対面の人との交流は苦手な生徒が多いが、生徒達の成長ぶりは頼もしく感じられた。赤十字活動を行う上で、初対面の人とも円滑なコミュニケーションを築くことができれば、その場での救助・奉仕活動を効果的に進めることができる。コミュニケーション力や調整力は、救急法などの技術と同じぐらい重要なものだと思う。

各地区で制作に協力していただいたトピックアルバムや、折り鶴、青少年赤十字のバッジ等はどの学校でも大変喜ばれた。また、フィリピンでは、赤十字の加盟校として赤十字の七原則を大切にしながら学校生活を組んでいることが伝わってきた。日本でも、赤十字の基本理念などに節目節目で触れる機会は設けられているが、それは意義深いことであるし、今後もより一層大事にしていくべきことであることを実感した。

〈フィリピン派遣事後研修〉

フィリピン派遣後、生徒達にとってフィリピンは、それまでより確実に「近い」国になったようである。9月23日の第一回事後研修の時、台風16号によるマニラ市内の洪水被害が生徒達の話題にのぼっていた。交流をとおして親しくなったフィリピンRCYの人たちとLINEやメールで連絡を取り合っているらしく、「救援活動で忙しく、夜も寝ていない」ことを心配する声が聞かれた。たった1週間ほどの交流でも、親善をはかり、互いをもっとよく理解しようとするきっかけとしては充分なのだろう。国は違っても、同じ「赤十字」の精神の基に活動していることが、信頼関係を結びやすくするのかもしれない。「国際理解・親善」は、

青少年赤十字の実践目標の一つであり、将来にわたって赤十字活動に携わっていくためには欠かせないものである。今回、フィリピンでの研修をおして生徒達が得たものは、現段階での親しみだけにとどまらないものであってほしいと強く願っている。

最後に、今回のフィリピン派遣で、派遣生徒の保護者の皆様、青少年赤十字指導者協議会の先生方はもちろんのこと、日本赤十字社福島県支部の皆様には様々な面で本当に細やかなお気遣いをいただきいた。体調を崩す派遣メンバーが一人もなく、また天候にも恵まれるという幸運は、安全に、実りある派遣になってほしいという全員の思いが呼び寄せたような気がしている。この場をお借りして深く感謝申し上げたい。



高校生やRCY、支部スタッフと一緒に

復興支援事業として2度目のフィリピン派遣事業について

日本赤十字社福島県支部 ボランティア係長 石 田 政 幸

《訪問日程作成の背景》

本年度も福島県高等学校青少年赤十字の国際交流事業は、東日本大震災・東京電力福島第一原発事故（以下、原発事故）に対する復興支援事業の一端として、「フィリピン派遣」事業を行った。

この報告書作成時点で、あれから3年半以上が経過しているにもかかわらず、未だに12万2千人に及ぶ福島県民が県の内外で避難生活を強いられている。避難生活の形態は様々、避難者に対する支援のあり方も様々。文化交流だけではなく、福島の現状を訪問先のフィリピン赤十字関係者や住民に伝えることが未だ重要である。

特に「絶対安全」であったはずの原発が、外部要因が一端とはいえ、万に一つも起こしてはいけない、放射性物質の大量放出という極めて重大な事故を起こした。未だに日本国内でも他県からは福島の実状は正しくも十分にも伝わっているとは言えない。海外においても同様とみられる。

東京電力福島第一原発の事故による周辺住民の苦悩が続いている。

県民全体が風評被害に苦しめられている。

《バタアン原発》

震災後、偶然見つけたウェブサイト、フィリピンに原発があり一度も稼動していないというBNPP (Bataan Nuclear Power Plant=バタアン原発)。福島の原発事故がバタアン原発の稼働停止を決定づけた。場所はルソン島バターン半島のモロンという町。マニラから車でおよそ4時間。バタアン原発のスタッフは今回も我々の訪問を快く受け入れてくれた。

説明は、震災後に訪れた日本の大学教授が作成

し同原発に寄贈したパワーポイント資料により行われ、高校生たちにはより分かりやすくなった。

沸騰水型と加圧水型の違いはあるが、バタアン原発により原発とはどういうものか、実物の原発そのものの大きさを見て内部構造の理解を図ることは、特に、福島県の人間には重要である。

《戦争加害者としての歴史の直視と新しい関係づくり》

8月15日頃にはパンパンガ州の赤十字では大規模な航空機事故対応訓練が行われることが予想され、今回は神風特攻隊の基地跡のあるマバラカットの訪問は無理と思われた。

そのため、バタアン原発への途中にある「サマット山」の訪問を日程に入れ、太平洋戦争の史跡の研修とした。

日本は戦時中は、何の落ち度のないフィリピン国民にひどいことを行ったわけだが、中国、韓国のような極度の反日感情や活動がない。殺し合い、憎しみの後に現在の日比関係があることは不思議であるが、高校生が研修を通じてそのようなことを理解することも重要である。

《災害と向き合うフィリピン》

1992年にはピナツボ火山の火山灰が大雨のため泥流となって下流域をのみこんで町が消えた。人間が多数、未だに地面の中に埋まつたまま、泥流で消えた町の上に新しい町が作られている。前回訪問したサンフェル NANDO のあたり。

今回、バタアン州赤十字支部側の都合が合わず急きょオロンガポ州の訪問が日程に上った。オロンガポ市もピナツボ火山で甚大な被害を被った。その被害からの復興の陣頭指揮にあたったのが、

⑩ フィリピンを訪問して(派遣団員所感)

当時市長だった、現在のフィリピン赤十字社長ゴードン氏であるとのこと。また、現在のオロンガポ州赤十字支部長をこのゴードン会長夫人が務められていた。

《訪問時期》

8月のお盆からまりの派遣事業は、時期的には、大雨や台風は覚悟しなければならない。

8月20日はフィリピンの国民の休日（英雄の日）で、土日にからんで連休が設定される。福島県支部ではJRC指導者講習会の開催時期とも重なる。

訪問日程作成にあたっては、これらの障害も考慮にいれながら、平日を可能な限り効果的、効率的に活用した訪問日程作成が必要となった。

貸切バスは福島市をスタートして途中、数か所で派遣メンバーを順に拾って行く。今回は全日空の便としたことで、ニノイアキノ国際空港では新しい小奇麗な第3ターミナルを利用した。

《パヤタス地区訪問の意義》

今回も、福岡のNGO「ソルトパヤタス」がメトロマニラケソン市パヤタス地区に拠点を開設した「リカセンター」を訪問した。日本にはない地域であり、生徒たちには、一番のカルチャーショックとなった。一般にはごみ山のある地区、スマーキーマウンテンとして名が通っている。日本でも貧困家庭の問題についての報道が増えってきた。餓死者のニュース、記事もいまや珍しくはない。フィリピンでは日本に比べ圧倒的に低所得者が多いにもかかわらず餓死者がたくさん出ているとも聞かない。貧困層の住民訪問の実施により、貧しさの中で住民がどのように暮らしているか、最下層の貧しさとはどのようなものか身をもって体験することは、日本に蔓延はじめた「格差社会」についての理解を深める一助になるだろう。

また、パヤタスでは今後のごみ山の拡張のために、立ち退きを求められる周辺住民が出てくるという。

福島県では原発事故により、一部の周辺住民は、復興名目により家屋敷、生業のための田畠が取り上げられようとしている。政府側にほんろうされる住民の姿が重なる。違いは、福島県の事例ではそれなりの金銭的補償が行われることである。いわゆる「金目」である。

《ラス・ピニャス市のリサイクル施設》

前回の訪問時、同市のVillar赤十字支部長の話の中で、メトロマニラ初の廃プラスチックリサイクル施設のことが出された。今回の研修最終日に、可能なら高校訪問との連続での見学を予定したが、高校訪問はなく、素材の違う材料（各種プラスチック、ココナッツの皮の繊維、家庭生ごみ、川や池に茂るウォーターリリー（浮草））による、4つのリサイクル施設を訪問した。製品は周辺住民へ還元され、意識変革にも役立っている。また、貧困層の就労場所にもなっている。

巨大なゴミ山が造成されている一方で、一部、資源や環境保護に気づいた人たちが進めている。

《今後の課題》

福島の現状報告には、パワーポイントは使用せず、A3判紙にカラーコピーしたパネルを多数用意し、派遣メンバーが交互に交流会で掲げての発表を行った。訪問した2つのハイスクールは図書・会議室のような場所でフィリピンメンバーとの距離が近く良かった。オロンガポ市のハイスクールでは、屋根だけのホールにおいての報告となり、フィリピンメンバーとの距離があった。

今回も持参した薄形CDラジカセも重宝した。

フィリピン赤十字本社と各支部では、スタッフ

フィリピンを訪問して（派遣団員所感）

のほかボランティアによるパワーポイントを利用した発表が普通に行われている。

フィリピン赤十字、支部の事業説明でも工夫を凝らした資料や映像が作成されていた。

パソコンソフトも他にワード、エクセルなどが利用されている。

街中には、スマートホンやタブレットをカメラ代わりにしているフィリピンの大学生などが目立って増えていた。

メトロマニラでは、交通渋滞が激しく、曜日や時間帯によっては移動のバスが全く動かないことがある。

研修日程作成にあたってはよく考慮する必要がある。

《災害多発国同士の理解》

フィリピンは日本同様災害の多い国である。年間30個ちかい台風の襲来、地震、火山噴火。ともにアジアの島国として避けることができない。フィリピン赤十字本社の副会長で若い実業家のミゲル氏は、災害の多い国同士、理解し協力しあえることが多いある、と述べていた。

赤十字のスタッフ同士、青少年メンバー同士がそのような相互理解を深めて行くことが大切である。



フィリピン派遣に参加して

日本赤十字社福島県支部 総務課 主事 富田 夕紀

2011年3月11日の東日本大震災以降、2年ぶりに再開した平成25年度に引き続き、今回も復興支援事業の一つとしてこの青少年赤十字国際交流事業『フィリピン派遣』の実施に伴い、支部職員として参加させていただきました。

フィリピンでの7日間は、参加した高校生にとっても、引率として参加した私にとっても、今までの生活で全く意識しなかったことを改めて実感する貴重な機会になりました。

○階級社会フィリピン

フィリピンで一番驚いたことが、階級について実感させられるということです。上流階級、中流階級、貧困層がはっきりしており、住宅などが顕著な例でした。上流階級だけが住む住宅街には入るだけでもセキュリティチェックがあり、中に入ると閑静な豪邸が並んでいました。一方、スラム街に並ぶ家々は屋根も壁も壊れているものばかり

で、台風が来たら家は壊れてしまうのではないかと思う家ばかりでした。家だけでなく、人々の衣服や生活についても、日本では感じることのない貧富の格差をフィリピンでは初めて実感しました。

この階級社会が、フィリピンでは世襲され、上流階級では親が知事から国会議員になると、空いたポストに奥さんが就き、さらに空いたポストに子どもが就く…となっているため、貧しい家庭に産まれた子どもは、どんなに優秀であってもその能力を生かせず、海外へ出てしまう現状もあるそうです。「努力をすることによって、自分の能力を生かすことのできる日本の社会とは大きく異なり、フィリピン国内ではどうすることもできず、海外へ出たフィリピン人の中で水商売に就く人が多いことが、同じフィリピン人として、とても悲しいことだ」と通訳のリンさんが話してくれたことがとても印象的でした。

○パヤタス

ケソン市パヤタスにはマニラ市から排出されるゴミの処分場があります。フィリピンでは、日本のようにゴミの焼却施設がないため、そのまま処分場に投棄することとなりゴミの山がどんどん大きくなっています。



ソルトパヤタスの奨学生家庭を訪問して

パヤタスの見学・研修プログラムを提供してくれた『特定非営利活動法人 ソルト・パヤタス』の事務所にバスが到着したとき、パヤタスに充満するゴミの臭いに衝撃を受けました。パヤタスでは、実際に3軒の家庭を訪問し、毎日の生活や子どもたちから将来の夢など話を聞くことができました。異臭、大量に発生するハエ、路地を歩く犬や猫の姿、そして私たちをじっと見つめる住民の姿。私たちは、現地スタッフが説明だけでなく、ガードとして前後を歩くという日本では経験しない見学スタイルでパヤタス内を歩きました。訪問したクリスティーナという16歳の少女の家では、7人の私たちが立っているだけでいっぱいの家に家族7人で住んでいました。弟はスカベンジャーとしてゴミ山のゴミを拾って換金する生活をしているといった話でした。ゴミ山は住民の住むところ

から高い塀で仕切られており、塀の向こうに監視員がいて、特に外国人観光客は撮影等ができないようになっていました。ゴミ山はあまり見られたくないもの、発信されたくない現状だそうです。

○フィリピンのおもてなし

フィリピンでは、行く先々で歓迎会や歓迎の夕食会がありました。フィリピン赤十字社や各支部、学校を訪問したときも、その場にいるフィリピンの方がにこにこしながら迎えてくれました。

普段、そして東日本大震災以降、福島県支部では日本人だけでなく海外の方をはじめ福島県内を訪れる方を迎える側の業務が増えています。その中で、今回のフィリピン派遣では、初めて逆に迎えられる側の立場でした。訪問先では、フィリピンの方がたくさんの時間を割いて私たちを歓迎してくれて、本当に感謝の気持ちでいっぱいでした。訪問先の学校では、生徒がテスト期間中でしたが、歓迎会を開いていただき、民族の踊りや楽器の演奏で私たちを歓迎してくれました。それに對し高校生が準備していた日本の文化の紹介として着物の着付けや茶道を披露した際には、フィリピンの高校生が身を乗り出して茶立てを見ていたり、着物の着付けのモデルに立候補してくれたりと心から私たちを歓迎してくれ、楽しんでくれているのがよくわかりました。

学校訪問以外にも各支部を訪問した際に、たくさんの支部スタッフが集まり、私たちに支部の業務等を説明してくれ、途中食べ物やお土産まで準備してくれました。昼食、夕食も一緒に食事をとり、日本人とフィリピン人が交互に座るようにしてお互いの交流を深めるため配慮していただいたことが何度もありました。フィリピンの方は積極的に話しかけてくれましたが、私の英会話がほと

○フィリピンを訪問して(派遣団員所感)

んど伝わらなかったため、滞在中私は少しづつ口数も減っていて、食事会におびえながら、隣に座ったフィリピンの方に申し訳ない気持ちでいっぱいになるとことさえありました。高校生も初めは「会話したくても会話が伝わらず、つらい」と言っていましたが、フィリピンの方は、会話が伝わらなくてもにっこりと微笑んだり「Can you enjoy it？」と笑顔で何度も話しかけてくれました。

フィリピンの食事を食べて2日の夜、フィリピン赤十字社のミゲルさん主催の食事会がありました。マニラ市内のホテルの近くの日本食の店で、肉じゃがや刺身、酢の物など運ばれた日本食を見て高校生が「なつかしい」と感激していました。また、オロンガポ市でゴードン夫人の食事会の際には、高校生が好きな食事ということで「ステーキ」が出てきたときも高校生が喜んで食べていました。

海外から来た方に対して、なんでも自国の文化を勧めてこないフィリピンの方のおもてなし、私達のことを考えてくれたうえでのおもてなしとても印象に残りました。また、どこへ行っても心から歓迎してくれるフィリピンのおもてなしに感謝でいっぱいでした。



茶立てに身を乗り出してみるフィリピンの高校生

○高校生の姿

今回のフィリピン派遣の主役、高校生8人にとっては、初めての海外であったり、初めてでは

ないけれども、訪問先が私達日本人のよく訪れるリゾートとは異なるフィリピンの姿であったりしたため、初めて経験することばかりの7日間でした。



フィリピンRYCメンバー（バタアン）

成田空港出発時の高校生は、不安な気持ちがいっぱい、「これはどうしたらいいですか？」という質問が多かったのを覚えています。

フィリピン赤十字社や初めての学校訪問では、自分で考えた自己紹介のメモを発表間際までじっと見つめている姿や日本の文化紹介ではステージの後ろに下がってしまったり、段取りがうまくいかず引率の先生が手伝っている姿を目にしました。反対にフィリピンの高校生は、ダンスも歌も堂々としたものでした。

その日の夜、高校生なりに「これではいけない」と思うものもあったのか、夜ホテルについてから高校生のみ全員で集まり、練習をしていたようです。ゆっくり話す、日本の文化紹介の写真パネルをもった人は動いてできるだけ多くの人に見てもらえるよう工夫する。それ以降、高校生の発表もどんどんよくなっていました。

英会話についても、当初フィリピン赤十字社や支部の方が交流のため、移動のバスでも高校生の間に座ってくれたものの、なかなか会話もなく、引率の先生が心配することもありました。高校生ながら自分達の会話力では、なかなか伝わらない

○フィリピンを訪問して(派遣団員所感)



高校生による日本の紹介

という壁を実感していたようでした。しかし、身振りをつけたり、携帯の画像を見せたりしてお互いの会話を理解できるよう工夫したり自分達で「なんとか会話しよう」という気持ちが次第に感じられるようになり、最後はフィリピンのユースメンバーやフィリピン赤十字社の担当職員と涙の別れをするほどになっていました。

今回のフィリピン派遣において私の最大の目標が、フィリピン派遣期間中トラブルなく高校生を引率することでした。参加した高校生は、私が高

校生のときには考えもしなかった「(高校時代に)国際交流をしてみよう」という志の高い生徒達でした。毎晩夜中まで発表の練習やその日の訪問記録の取りまとめ等があり、朝も集合時間が早いため、眠い目をこすりながらバスに乗り込んでいました。滞在中もメンバーで仲良く助け合い、体調を崩すメンバーもなく、とても楽しく有意義な7日間でした。最終日、高校生たちはみんなで、フィリピン滞在中お世話になった通訳のリンさん、フィリピン赤十字社のジャンさん、引率の佐々木先生や日下先生、そして支部職員の石田係長や私にまでお礼のメッセージボードを作ってくれました。引率という立場でありながら、高校生よりもずっと年上ながら、気がつけば高校生とともにフィリピン派遣を楽しんでいました。

成田へ到着し福島へ向かう頃には、高校生のメンバーはみんなぐっと成長した姿を感じました。このフィリピン派遣で感じたことや学んだことを高校生活や将来へどのように活かしていくのか本当に楽しみです。



帰国後のメンバー

「フィリピンの教育普及の問題」

福島県立福島東高等学校 2年 西野剛生

私は将来十分に教育が受けられない子供たちのために教育支援をしたいと思っている。フィリピンに行って学校に行きたくても行けない子供たちを目の当たりにして、どうして教育を受けられなかという疑問を持ちその原因を調べ、解決策や自分にできることを考えた。

最初に、初等教育における就学状況をみていく。フィリピンでは、正規入学年齢に入学しない子供が半数ほどいて非常に多い。(1998年DHSデータ) そして正規年齢で入学するか否かを問わず、ともかく学校へ修学したことのある子供（小学校1年修了以上）は98.8%となっている。(1998年DHSデータ) つまり、ほぼ全員が学校へ行く機会が提供され、1度は就学していると考えられる。しかし問題なのは、入学したものの進級できない子供が多いということだ。1997年についてみてみると非進級率8.83%のうち留年率は1.97%、中途退学者は6.86%という現状だ。(DHSデータ) この年だけでなく毎年のように進級できない子供がいる。このことが大きな問題だと思う。私は問題の要因を行政側と家族側の双方から考えてみた。

まず行政側の問題としては「学校の数の不足」、「教育の質の貧困」だ。フィリピンには1～6年生を収容できる完全校がある一方、就学人口、教員、施設の不足により6年制が実施できない小学校、すなわち不完全校が1995／1996年度時点でのフィリピン公立小学校34,231のうち10,768(31.5%)もあるのだ。(Department of Education) そのようなものとしてまず、1～4年生だけしか収容できない4学年学校がある。さらに、6学年学校であるにもかかわらず実際は教室や教師数の不備か

ら5年生までしか収容できない5学年校や3学年学校以下なども存在している。私が訪れた学校は子供の数が多すぎて教室内に収まらず、廊下やベランダに出ていた。1日を3つのシフトに分けても足りない都市部もあれば、まったく学校へのアクセスがない子供もいて地域に偏りがあるそうだ。日本にも、へき地教育という山間・離島などの生活に不便な場所で学ぶ子供もあり、生徒数が少ないため複式学級や小学校と中学校が合同である場合もある。しかし、それでも日本の義務教育は行き届いており人の住むところには必ず義務教育機関がある。フィリピンでもへき地教育のように歩いて通える距離に学校を設置して、どこに住んでいたとしても十分な教育を受けられるように完全校の数を増やしてほしいと思う。しかし、学校の数が増えても教師が足りなくては質は高められない。小学校では進級の際に進級試験に合格しなければならないのだ。その試験が難しすぎることもあるが、1～6年までストレートで進級できる人はフィリピン全国で67%（したがって留年経験者33%）である。マニラ首都圏が最高値の85.5%（同じく14.5%）であり、ムスリム・シンダナオ自治区に至っては27.8%（同じく73.8%）



ソルトパヤタスにて

自由研究

という低さである。(1982~1996のDepartment of Educationデータ) 進級試験不合格者が多いと留年者や中退者も多数出てしまう。2011年フィリピン教育省によると教師の数が44,000人不足していてその分朝、昼、晩、のシフト制を採り、教師は最大限に活用されかなり劣悪な中での授業が実施されている。それでは質を悪くしてしまうと思った。

次に家族側の要因としては「家族の収入水準、子供の数、そこで通常使用される言語、国内移民であるか」等の環境が影響する。日本は1つの言語を使用する国だからなじみがないが、フィリピンの小学校では国語であるフィリピノ語と英語が教授語として用いられる。フィリピンには80を超える方言が存在するが、タガログ語はこのフィリピノ語に最も近い言語だ。したがって母語がタガログ語の人は、ほかの方言話者よりも授業の理解も容易であり就学継続も有利だと考えられる。また、国内移民の家族は到着地において相対的に貧しいことが多く、日々の生活を送ることが優先課題となり、子供の就学には不利となる。

近年フィリピンの政府も大きく動き出した。フィリピン政府は2012年に2013年度の教員採用人数を61,510人と発表した。教室・教員数不足の解消を図る取り組みの一貫で施設についても31,789

の教室が新たに作られた。(Department of Budget and Management) また2016年に「Kto12」という基礎教育改革が行われるそうだ。「Kto12」の「12」は12年制を指し、中学校3年と高校3年に切り替え基礎教育機関は日本と同じ年数になる。また「K」はKindergarten(幼稚園)を指し、1年間の幼稚園教育もこれから全国で導入されるそうだ。

教育年数も国際基準となるフィリピンで、今行政は大きな1歩を踏み出している最中なのである。私は日本に生まれてあたりまえのように学校に通いすばらしい教育を受けていることのありがたさにこの研究を通して気づくことができた。教育は家庭の経済状況や行政の政策、また企業の望む人物像など様々な面で複雑に大きく社会と絡み合っていることを知った。高校生の私にできる事とは多様な価値観の存在を想像しながら物事を観察してさらによく理解し、何が問題かを見分け、何をどうすればいいのか筋道を立てて考え続けることだ。私はそうした問題解決能力を高められる大学へ進学し、フィリピンの教育のみならず世界の国々に目を向けて研究し、さらにそれを周りに説明できるようにして理解者を増やし、プロジェクトを成功させたい。



名刺と交流品のJRCワッペンを手にして

研究テーマ「フィリピン台風の被害・現状・対策」

学校法人福島成蹊学園福島成蹊高等学校 普通科 2年 澤田夏子

今回、私はフィリピンに派遣されるにあたって、2013年に大きな被害をもたらした台風の被害・現状・対策について学ぶことを1つのテーマに活動してきた。

台風については、2013年に起きた大きな台風に加え、今年起きた台風の話をフィリピン赤十字本社や、それぞれの支部への訪問の際、スライドなどで説明していただいた。フィリピン台風では、死者6,201人、負傷者28,626人、行方不明者1,785人、被災者数1,600万人以上、家屋114万戸余が倒壊などの被害を受け、インフラや農業・漁業などへの被害総額は366億ペソ以上（約854億円）に達するという被害をうけた。この台風が起きたのは私たちが訪れた場所とは遠く離れた田舎だったので、都会に来ている人が多かったらしいが、4～6か月で帰らなくてはいけないそうだ。また、田舎の方にはストリートチルドレンはいないので台風による彼らの被害はなかった。行方不明者については5～6年見つからなければ死亡になると法律で決まっている。今現在、必要としているものは、家・魚・ココナツなどで、赤十字からは、33,880の家を寄付した。台風が起こった当時の医療については、8,800人の医療関係者がいて、その半分ほどが赤十字の看護学生さんだったそうだ。その学生さんたちは、どんなに家庭が苦しくてもボランティアで活動していると聞き驚いた。台風はいつ起こるかわからないので、次もしまだ被害に遭ってしまった場合はひどくならないようになくてはいけないと黙っていて、実際今年起きた台風の際は、2013年の台風の経験を生かし、被害を小さくできたそうだ。フィリピン赤十字本社の社長さんは、東日本大震災の際、東京で開催

された会議に行ったとおっしゃっていた。また、日本人も台風が起きた時、すぐにフィリピンにボランティアへ駆けつけたらしい。このようにお互いにお互いの国のこと想到いあっているところから、世界は繋がっているのだと感じた。

フィリピン派遣に行く前は、フィリピンについて、台風についてほとんど知らなかった。台風のこと以外にもフィリピンの文化や貧困についてなどたくさんことを学ぶことができ、フィリピンに対する思いや印象、そして自分自身も派遣前と派遣後では大きく変わった。また、日本に帰つてからもフィリピンを気に掛ける回数が自然と増え、フィリピンのためにできることはできないか、と考えることも多くなった。実際に現地に行き現地の方から直接お話を聞くことで、テレビやネットで見聞するより心に伝わること、感じることが大きく違った。日本でJRCの一員として活動している自分のJRCの活動に対する意識が高くなり、今まで以上に人の役に立つ活動を積極的にしていきたいと思った。フィリピンで学んだことを、ここで感じた想いをたくさんの人々に伝え、フィリピンについてもっと知ってもらいたい。



フィリピン赤十字本社

『国際協力・理解』

福島県立安積高等学校 2年 鬼頭朋加

「言葉が通じなくても笑顔があれば分かり合うことができる」この言葉は私たちがフィリピン派遣で出会ったレッドクロスユースの人に、私が英語をうまく話せないことを謝った時、彼が言ってくれた言葉だ。この言葉はフィリピンから帰ってきた今でも私の心に強く残っている。

様々な土地で生まれ、違った環境や価値観の中で育ち、生活の仕方もそれぞれであるわたしたちが、言葉や宗教の壁を越えて協力しあうことができるのか。その疑問に何らかの答えを見つけてみたい。これがフィリピン派遣への参加を希望した理由の一つである。

私がフィリピンを訪れて驚いたことは、フィリピンで出会った人々は、私たちがタガログ語どころか英語も上手に扱えない事をわかっても、私達に話しかけてくれる人が多かったことだ。対して日本人は、全員がそうであるとはいえないが、外国人のように見える人に話しかけられて、英語が話せないという理由で何も聞かずに逃げてしまった、という話も聞く。私はこのような国民性の違いはそれぞれの国で話されている言語の数の違いにあると思った。フィリピンでは公用語として主に英語とタガログ語が使われている。しかしそれ以外にもセブアノ語などの言葉が地域によっては使われているところもある。日本では基本的に日本語しか使われていない。そのため日本国内では私たちは日本語を話せれば生活できる。しかしフィリピンでは違う。公用語である言葉を使いこなすだけでなく、国内でも自分とは違う言葉を話す人ともコミュニケーションをとる必要がある。これはフィリピンの人々が笑顔が多いことの理由の一つでもあると思う。また、これもフィリピ

ンを訪れて感じたことであるが、笑顔であることは他人とコミュニケーションをとりやすくすることに大きな影響を与える。



フィリピン赤十字本社の青少年赤十字係のジャンさんと

フィリピンを実際に訪れるまでは、現地で出会うフィリピンの人ときちんとコミュニケーションをとることができるのが不安だった。その不安の答えを見つけることが私の目的でもあったため、出会った人たちには積極的に話しかけていた。学校交流ではなかなか個人と話す余裕は無かったが、レッドクロスユースの人たちやソルトパヤタスでお世話になった人たちと話した時には、自分の意見を伝えられるように努力し、また相手の意見を丁寧に聞くことができた。私の話す言葉は拙く、伝えられる内容は限られてしまったが、互いに身振り手振りを交えて相手を理解するために努力し、笑顔を浮かべて話すことで仲良くなることができたと思う。

今まで私たち日本人は国内だけで生活することも可能だった。しかし、これからはそうはいかな

自由研究

いだろう。つまり日本語を話せば意志疎通ができるということではなくなる。そこで私たちは笑顔と相手を理解しようとする努力を忘れず、もっと積極的になるべきだと思う。私はこのことをフィリピンの人たちとの交流で学んだ。私がフィリピンで初めて会った人とも話しあい、一緒に行きあつたように、どのように文化や生活に隔たりがあったとしてもこの2つの努力を怠らないことで互いを理解し協力することができるだろう。



笑顔で交流できました



「フィリピンの薬剤師について」

福島県立あさか開成高等学校 1年 新田 優花

私は、将来薬剤師になりたいと考えているので、フィリピンの薬剤師は日本の薬剤師とどのようなところが違うのか、調べることにした。日本とフィリピンの薬剤師の仕事内容やニーズは違うのかなど疑問に思ったからだ。また、フィリピンは自然災害が多いのでその時、薬剤師はどのような活動をしているのかなども知りたいと思った。

今回フィリピンを訪れ、フィリピンの赤十字のメンバーや、現地の高校生に直接薬剤師について聞いたり、SNSを使って質問をしたりした。日本で、薬剤師は専門性も高く、高収入で安定している職業ということもあり人気の高い職業であるが、フィリピンでも人気のある職業なのか質問し

たところ、ほとんどの人が「人気のある職業だ。」と答えてくれた。しかしながら、訪ねた人たちの友人や知り合いなどには薬剤師を目指している人は少ないという回答だった。その中でも友人が薬剤師を目指しているという、四日目の食事会で出会ったフィリピン赤十字のメンバーであるジュリアン（Jillian）さんに詳しく聞いてみたところ、ジュリアンさんの学校には薬剤師を目指し、大学に行くために一生懸命勉強を頑張っているという人がたくさんいると説明してくれた。そして、薬剤師は国際的なニーズと高い給料であるため人気のある職業であるそうだ。薬剤師が日本と同様に高収入で、免許を取得することが難しいということは同じであることが分かった。

次にフィリピンと日本の仕事の共通点や違いについて調べてみた。フィリピンと日本の薬剤師の共通点は、病院で治療をして調剤薬局で薬を貰うとき必ず一日に飲む量や、飲み方、注意しなければいけないことなどを丁寧に説明するということだ。私がフィリピンの薬剤師について調べたときは、説明がされないという情報も載っていたが、



フィリピンのドラッグストア

自由研究

実際にフィリピン赤十字のメンバーに聞いたところ、日本と同じであることが分かった。

そして日本と大きく異なる点は、日本では調剤薬局とドラッグストアはまったく違うものであるが、フィリピンでは大した差がないということだ。日本では病院から出た処方箋に基づいて作られる薬は、調剤薬局でしか買えない。だが、フィリピンではドラッグストアのほとんどが調剤薬局のため、病院から出た処方箋に基づいて作られる薬がドラッグストアで買うことができる。私は、六日目に行ったモールオブアジア（MOA）という大きなショッピングモールにあるドラックストアに行つたが、ドラッグストアは日本と似ており、市販の薬や化粧品、お菓子やジュースなどの食べ物も売っていた。

もうひとつの違いは、日本では処方箋で出す薬は国で価格が決まっているが、フィリピンではお店によって薬の値段が違うということだ。安い店があるとも言っていた。

そして、三日目に行った赤十字のケソン市支部では、災害時にメディカルミッションを行つていると聞いた。やはりフィリピンは自然災害が多いのでニーズもあり、そのような場でも薬剤師が活躍していることが分かった。

フィリピンと日本の薬剤師の仕事内容などは、あまり変わりがなかったが薬の値段が決まってお

らずドラッグストアでも処方箋に基づいて薬が出せるというのはとても驚いた。安く、どこでも購入できるというのは便利であると思ったが、反面、薬剤の使用については心配な部分もあると思った。

今回の派遣で、フィリピンの薬剤師の制度や、日本との違いや共通点などについて知ることができて良かった。驚くこともあったが、フィリピンは自然災害が多いのでメディカルミッションを通して薬剤師が活躍していた。私は今回のフィリピン研修でフィリピンとの関わりをもつことができ、現地でも多くの出会いに恵まれた。このつながりを大切にし、フィリピンのためになるような活動をしていきたいと思った。そして将来は薬剤師として、貧困地域の子供たちを助けるメディカルミッションなどにも携わっていきたいと思った。

*SNSについて

人と人のつながりを促進サポートする、コミュニケーション型のWebサイト。友人・知人間のコミュニケーションを円滑にする手段の場を提供したり、趣味や嗜好、居住地域、出身校あるいは「友人の友人」といったつながりを通して新たな人間関係を構築する場を提供する会員サービスのこと。（ツイッター、ミクシー、フェイスブックなど）



フィリピン赤十字社ケソン市スタッフ、RCYのメンバーと

「フィリピンの医療について」

福島県立白河旭高等学校 3年 川井典恵

私はフィリピンの医療について事前に調べ、予防接種を受ける事で感染が抑えられる結核や狂犬病、すぐに病院で適切な治療を受けることができれば、死に至ることは少ない病気で亡くなっている人が多くいることを知った。それをふまえて、医療についてのアンケートをフィリピンの43人の方々に答えてもらった。

まず、貧富の差の大きいフィリピンで医療保険制度について知りたいと思った。医療保険に入っているかという質問に、入っていないという人が約3割いた。アンケートに答えていただいた人々は、赤十字職員や学生のみの限られた対象であることを考えると、正確とは言えないかもしれないが、保険に入っていない人が多いことが分かる。フィリピンでは仕事をしている人は保険に入ることができるが、収入の少ない自営業の人や仕事のない人は保険に入ることが難しいということを聞いた。また保険に入っていたとしても、治療費は保険で補われるが薬代は自己負担である。そのため、病院に行っても薬代がなく、後払いをするという人もいた。また、保険に入っている人が事故死した場合に下りる保険は35万～40万と日本と比べて少ない。国民全員が安心して加入できるような保険制度が必要であると思った。しかし、そのためには現在職が無い人々の働く場所を作るなど保険に入ることのできる環境が必要であると感じた。

フィリピンでは子供の時に結核・破傷風・B型肝炎・麻疹風疹・ヘモフィルスインフルエンザb型菌・(Hib) 感染症・ジフテリア・百日咳・肺炎球菌感染症・ポリオ・ロタウイルスによる感染性胃腸炎の予防接種を受けなくてはならない。だ

が、十分に予防接種を受ける事ができているのは60～70%という答えが多かった。フィリピンの子供の死亡原因に肺炎や下痢が多いのは予防接種が不充分であることも理由の一つであると感じた。

フィリピンの医療の課題は何だと思いますかという質問には、エイズ・結核・医療施設の不足・医療費が高いという答えが多くあった。また、私はフィリピンの生活環境により病気になりやすくなったり、悪化したり、感染が拡大したりするのではないかと思った。街を走る車からは黒い排気ガスがでているのを多く見かけたり、川は黒く濁っていたり、道路には痩せ細った犬や猫が多くみられた。病気の感染や感染拡大を未然に防ぐには環境の改善も必要であると思った。フィリピン赤十字では、献血やエイズについて知つもらう活動や、看護学生の育成、手の洗い方の指導などをしていると聞いた。このような献身的な活動をボランティアを含めたたくさんの人々の協力で行うことにより、誰かの命が救われていると考えると、フィリピン赤十字の活動は素晴らしいことであり、重要な組織であると思った。

貧富の差が大きいフィリピンで、防ぐことのできるような病気にかかる人が無くなり、全ての人が充分な医療を受けることができるようになるには、保険・仕事・生活環境・医療施設など、多くの難しい問題があると思う。しかし、フィリピン赤十字のような活動をもっと拡大し、政府・地域が一丸となり協力していけば、いつか誰もが安心して健康に生活できるのではないかと思った。そして今回、フィリピンの医療について調べたことで日本ではあたりまえだった病院に行くこと、薬を飲むこと、予防注射を受けられること、恵まれ

自由研究

た環境で生きていることのありがたさについて考えることが出来た。また、これからはより一層命があることに感謝して、命を大切にして生きていきたいと思った。医療従事者を目指す私は、フィリピンだけではなく、世界中の人々が充実した医療を受けられ健康であるためにはどうすれば良いかをこれからも学び、考えていきたいと思う。



フィリピン赤十字本社社屋内献血ルーム見学



「ストリートチルドレンについて」

福島県立喜多方桐桜高等学校 情報システム科 2年 花 見 涼

私がフィリピンに来て最初に驚いたのは、バスの移動中に外の景色を見ていたら道路に裸足の子供がいたことだ。それも一度限りではない。道路以外にも橋の下などでもよく見かけた。そして、何より滞在中に一番驚いたのは5日目の朝に市場へ買い物に行った時のことだ。私たち団員はドライフルーツの店で商品を見ていたのだが、いきなり足を叩かれたのだ。私が振り向くとそこにはまだ3～5歳くらいの男の子がいた。男の子は手を差し出してこちらを見つめてくる。もちろん「お金頂戴」という意味である。申し訳ない気持ちもあったが、派遣中に絶対お金を渡してはいけないと最初から決められていたこともあり、私は男の子に「sorry」と一言謝るしかなかったのだ。その後も男の子は私以外の団員にもお金をねだって手を差し出していた。もちろん決まりなのだから誰もお金をあげないのだが、内心男の子が可哀そうだと皆感じていたと思う。私自身も本当にストリートチルドレンと接触するとは思っておらず、この体験を通してフィリピンの貧富の差を身を以て感じてしまったのである。

そもそもなぜストリートチルドレンが増えているのかというと2つの要因がある。一つは「直接

的な要因」として極端な貧困、児童虐待、育児放棄などが原因となり、親に捨てられる子供、耐え切れず自ら家を出る子供がいること。もう一つは「社会的な要因」として国内の経済停滞または経済格差の拡大、紛争や自然災害などによる貧困が原因の場合が多く、子供たちの教育や保健衛生を支援する政策が不十分であることとも、子供たちを過酷な環境に追い込んでいる要因となっているようだ。そしてどちらの要因にも「貧困」が深く関係しているのだ。フィリピンの貧困問題というのはとても深刻で、私自身も滞在中に訪ねた場所によってもパヤタスのような貧困地域もあれば、ラス・ピニャス市内で見られた高級住宅街もあった。フィリピンは貧富の差が激しすぎるのだ。

この貧富の差はフィリピンの急激な都市化が原因であると言える。急激な都市化は不健康的なスラム住宅を増やし、農村部で暮らす人々が地方の貧困から逃れるため、都市に集中的に移住するが、都市部も急激な人口流入による職不足となり、職に就けても不安定な低賃金・長時間労働となってしまうのである。こうした都市部での苦しい生活が続くことが、子供たちをストリートへと押し出す原因となっているのだ。

自由研究

そしてストリートチルドレンとなった子供たちはどうやって生きていくのだろう？働くしかないのだ。ストリートチルドレンは主に、くず拾い、車見張り、物売り、荷物運び、靴磨き等を仕事としているのだが、先程述べた通り、都市部の職不足も深刻なのだ。中には、スリや麻薬の売人などの犯罪、売春などの精神的、肉体的に苦痛の大きい仕事に手を出す子供もいる。私が最初に述べた男の子もこのように働くなくてはならないのだろうか？今日を生きられているのだろうか？日本という豊かな国ではこんな現状は考えもつかないであろう。しかし、私たちがこうして豊かに暮らしているこの瞬間にも、ストリートチルドレンたちは死と隣り合わせで生活しているのである。先進国に住む私たち日本人はフィリピンのようにストリートチルドレンの問題を抱える国々に何をして

あげられるのか、私たちJRCにできることは小さいことかも知れないが、最近私の学校では地域の企業と連携して古着を回収し、貧しい国に送る活動をしている。この活動のみならず身近な募金活動等から貧困の国を支援し、ストリートチルドレンとなる子供を少しでも減らしていくことができるよう私自身も取り組んでいきたいと思う。



富裕層の住居



「日本との生活の違いと電気事情」

福島県立勿来工業高等学校 電気科 2年 小林憲人

フィリピン派遣ではたくさんの発見がありました。その多くは現地に行ってみないとわからないことで私も初めて知ったことがいくつかありました。このテーマを掲げた理由は単純に日本との生活の違いを少しでも知りたいと思ったことと、私が電気に関して興味があったからです。

○日本との生活の違いについて

日本とフィリピンの生活の違いを調べていて興味を持ったことは、水道がすべての地域に普及していないということです。これは実際に訪問するまでわからなかったことでした。訪問中トイレを貸していただいたときに、大きなバケツに入った水とその水をすくう桶が用意してあって、その水を

使ってトイレを流したことが何度かありました。また、水道水は日本のように安心して飲めるものではないので、滞在中はミネラルウォーターを毎日飲んでいました。

食も日本との違いがありました。多くの店ではタイ米が使われていました。日本で食べている国産米と違って、粘り気がないのでかなりパラパラとしていて箸で食べづらいものでした。

○電気事情について

首都マニラを抜けるとトタンだけで作られた家や、コンクリートブロックをただ積み上げて屋根にトタンをかぶせただけの家が多く立ち並んでいました。こんな建物を見ていてふと思ったのが

自由研究

「こんな家にも電気は通っているのだろうか…」という疑問です。これは電気科の生徒として気になる点でもあったので、通訳（ガイド）のリンさんに質問することにしました。電気の通っていない家の多くは盜電をしているということを教えてもらい驚きました。多くの家が盜電をする理由は電気代が高くて払えないからだそうです。中にはきちんと料金を払って電気を使用している家もありますが、ほとんどは電線を目で追っていくとそのまま家の中に引き込んでいるものばかりでした。また驚いたことはこれだけではありません。それは、そのような引き方でも普通に電気が使えているということでした。電線には電気が流れているので電気が使えるのは当たり前なのですが、何戸もの家が盜電をしているのなら多くの電流が流れるため、変圧器の保護装置が作動して電気が使えなくなると思います。ところが、現実にはどの家も電気を普通に使っているようで「電気に詳しい人が工事してくれたのか、それとも自分で工事をしたのか」と、とても興味が湧きました。しかし、盜電についてこれ以上詳しく伺うのは…と思い、それ以上は聞きませんでした。一方、経済

的に余裕がない家庭が必ずしも盜電をしているわけではないということを、次に訪れたソルトパヤタスで知りました。そのときに訪問した家で「電気はどうしているのか」という質問をしたところ、「電気代を全部払えるほど余裕はないので、近所の家から延長コードで電気を分けてもらっている」ということを聞きました。その家はただで電気を分けてもらっているのではなく、毎月少額ではありますが使用料を払っているそうです。フィリピンの電気代は貧困で困っている人にとってとても高額なのでこのことを、私たち含め先進国による資金的、技術的援助などで改善することはできないものかと思いました。



混み入った電線



パヤタスを訪問して思ったこと

学校法人山崎学園福島県磐城第一高等学校 2年 佐川愛実

今回のフィリピン派遣で一番心に残っているのは、3日目に訪問したソルトパヤタスだ。まずリカ（LIKHA）センターでパヤタスについての簡単な説明を受けた。パヤタスのイメージはゴミの山・汚い・貧しいとの説明。私もそのように思っていた中の一人だ。パヤタスには119,000人が住んでおり、失業や立ち退きにあったことを理由に、人に被害を与えないことからパヤタスに人が

集まってるそうである。

2000年7月10日スマモーキーマウンテンが崩落し何百人もの人が亡くなってしまった。300人近くは遺体で見つかったそうだが、まだ確実に埋まっている人がいるそうである。14年が経った今、どこにでもあるような緑の山となっていた。何故、草が生い茂っているのか疑問に思っていると、政府が上から種をまいたという衝撃的な言葉を聞いた

自由研究

た。以前の姿を消そうとしているのか、政府の行動は決して正しくはないと思った。

現在また新しいスモーキーマウンテンは、とにかく思っていた以上の高さを超える言葉が出なかった。ケソン市内のゴミを運びに毎日500台のトラックが入ってくるそうだ。日本のように焼却という手段を選ばず集めて埋め立てる方法に、また山が崩落してしまう危機も強く感じた。近くまで行くことは可能だったが、フェンスで仕切られておりそこからは立ち入ることが出来なかった。18歳以上の出入りが許されているそうだが、実際に生活に苦しむ家庭を見た私は、小さい子供が出入りしていてもおかしくはないと思った。ゴミを拾い再利用となるものを売るスカベンジャーにとっても必要であり、なくてならないのかもしれない。しかしスモーキーマウンテンは1日でも早くなくなって欲しいと強く思った。

パヤタス地区に暮らす6人家族+養子の女の子1人、計7人家族の家庭を訪問した。家に向かうまでの道のりには、やせ細ったイヌやネコ、ハエが無数に飛び回り衛生的にも良いとは言えなかつた。前までは少し離れたところに住んでいたそうだが、2カ月ほど前に買われてしまい、現在は親戚の持ち家でお金を払わずに暮らしているそうである。到着し中に入ると、7人で生活するには狭すぎる空間だった。父は食品管理の仕事をしていたが、2008年に薬のケンカに巻き込まれ亡くなってしまったそうだ。月3,500ペソ（日本円で約7,500円）と少ない収入で、贅沢の出来ない生活だ。電気は近所の電気を無料で譲ってもらっているそうで、近所の温かさを感じた。また蛇口をひねれば簡単に出てくる水道はなく、必要な水は近くの井戸から汲んでいるそうだ。お母さんに今の夢を尋ねたところ、子供が学校を卒業することだと答えてくれた。子供のことを第一に考えるお母さんに

感動した。

訪問前、パヤタスに行くことは現地の人にとって良くは思われないと想われたが、帰り際には「来てくれてありがとう」と言う言葉をもらい、パヤタス地区を訪問して良かったと心から思った。同時にLIKHAセンターの方は、パヤタスの現状を多くの人に見てほしいとも口にしていたので、まずは私たちがパヤタスの現状を伝えていかなければならないと思った。



遠くに広大なゴミ山が見える

●事前・事後研修会の開催

○第1回事前研修

日 時：平成26年6月21日(土)

10時30～15時30分

会 場：福島県赤十字血液センター3階 会議室

内 容：

1. 日赤福島県支部あいさつ
2. 派遣メンバー自己紹介
3. 平成26年度派遣事業について
 - (1) 派遣事業の目的・概要
 - (2) 派遣日程案
 - (3) 交流内容について
4. 今後の日程、自己学習、準備について、質疑応答
5. 赤十字の活動について
6. 青少年赤十字について
7. その他



初めての顔合わせです

○第2回事前研修会

日 時：平成26年7月20日(日)

10時30分～15時30分

会 場：日本赤十字社 福島県支部3階 会議室

内 容：

1. 派遣事業について
 - (1) 旅行日程、旅行手続き、経費等
 - (2) 交流内容、交流物品
 - 研究テーマ
 - 自己紹介英文
 - 文化交流内容
 - その他
2. 報告書の作成
3. 今後の予定



交流プログラムの練習

○事後研修

日 時：9月23日(火)

10時30分～15時30分

会 場：日本赤十字社 福島県支部3階 会議室

内 容：

1. 報告書について
 - (1) 訪問日誌について
 - (2) 感想について
 - (3) 自由研究について
2. 各地区総会での報告について
3. その他

●報告会の開催

○県北地区高校JRC

日 時：10月30日(木)

場 所：日本赤十字社 福島県支部3階会議室

参加人数：50名

報 告 者：西野 剛生 澤田 夏子

聴講者の感想：台風被害の支援に赤十字が活躍していることがわかった。日本の機材も使われていて交流があることもわかった。戦争の史跡が残されているのは被害が大きかったからではないかと思った。

○県南地区高校JRC

日 時：10月17日(金)

場 所：郡山市民文化センター

参加人数：69名

報 告 者：鬼頭 朋加 新田 優花 川井 典恵

聴講者の感想：原発内部の見学ができることに驚いた。フィリピンでも原発を動かしたい人とそうでない人がいるんだと思った。コーヒー1杯で1日を過ごすという現実に驚きだけでなく、何とかできないのかと思った。



2人で報告しました

○いわき・相双地区高校JRC

日 時：11月4日(火)

場 所：いわき市生涯学習センター

参加人数：63名

報 告 者：小林 憲人 佐川 愛美

聴講者の感想：献血の様子が日本と同じで赤十字が行ってたのがわかった。ただ本社だからかな？とも思った。マニラと違う地区での格差の報告はなんともいえない気持ちになった。

○県高校JRC

日 時：11月6日(木)

報 告 者：西野 剛生 澤田 夏子 鬼頭 朋加
新田 優花 花見 涼 小林 憲人
佐川 愛美

場 所：清陵山俱楽部

参加人数：113名

聴講者の感想：フィリピンのイメージが変わった。ゴミを再利用することを仕事にしている人たちの存在が初めてわかった。ゴミをどうして燃やさないのか考えたら焼却所の問題だけでなく職業の問題もあると思った。交流時の高校生のダンスをする人たちが同年代でなく大人っぽく見えた。



県大会での報告です

平成25年度 日本赤十字社福島県支部主催 青少年赤十字国際交流事業 “フィリピン派遣” 実施要項

1. 目的

青少年赤十字の実践目標のひとつである「国際理解・親善」の具体的事業として、県内の青少年赤十字メンバーを海外の赤十字加盟国へ派遣し、同国の青少年赤十字メンバーらとの交流研修を通して、国際性豊かな青少年を育成し、本県青少年赤十字活動のより一層の推進を図るために実施する。

特に、福島県は東日本大震災による地震・津波災害に加えて世界にも類のない原子力発電所からの放射性物質の大量放出の被害をうけ、県民は未だにその後遺症にあえぎながら、復興を模索している状態にある。

平成26年度派遣事業でも県内の青少年赤十字加盟校の他に被災高校の生徒からも参加を募り、被害の実態を海外に伝えるとともに数多くの支援を受けたことへの感謝も伝えながら現地の青少年との交流を図る。

2. 主催

日本赤十字社福島県支部、青少年赤十字福島県指導者協議会

3. 後援

福島県教育委員会、福島県高等学校長協会

4. 実施時期

平成26年8月10日(日)～16日(土)
泊7日 成田空港⇒マニラ直行便
(滞在研修)

5. 派遣国、地域

フィリピン共和国 マニラ首都圏、近隣州

なお、実施期間と派遣先の詳細については、日赤福島県支部と

フィリピン赤十字社との間の十分な調整のもと決定し実施する。

6. 派遣人員

高等学校青少年赤十字メンバー並びに被災高校（青少年赤十字未加盟）の高校生から8人（各地区から2名程度の目安）

高等学校青少年赤十字指導者（教師）2人
日本赤十字社福島県支部または管下施設職員 2人
合計12名

7. 参加要件

（原則として下記の条件を満たしていること）

(1) 青少年赤十字加盟高校青少年赤十字メンバー

① 地区主催の青少年赤十字リーダーシップ・トレーニング・センターを修了し、ボランティア・サービス、先見等の基本的理解ができていること。

日頃の青少年赤十字活動に積極的に参加していること。
(学年は2年生が望ましい)。

② 心身ともに健康で、事前・事後研修に参加することができること、帰国後各地区において行われる報告会に参加できること、支部長（知事）表敬訪問ほか現地派遣期間中の集団生活による研修に支障なく参加できること。

なお、健康診断書の提出は求めないこととする。

③ リーダーとしての資質を備え、将来とも赤十字活動に関わっていこうとする意欲があること。

④ 語学力は必ずしも重視しないこととするが、異文化での適応性が求められる。

(2) 被災高校の生徒（青少年赤十字未加盟高校）

① 心身ともに健康で、事前・事後研修に参加することができること、帰国後各地区において行われる報告会に参加できること、支部長（知事）表敬訪問ほか現地派遣期間中の集団生活による研修に支障なく参加できること。

また、日程上可能であれば7月中旬～8月上旬にかけて行われる県組織及び各地区組織主催の青少年赤十字リーダーシップ・トレーニング・センターに参加できること。

なお、健康診断書の提出は求めないこととする。

② 研修の成果を学校や地域に還元していただくこと。

③ 語学力は必ずしも重視しないこととするが、異文化での適応性が求められる。

(3) 青少年赤十字指導者（教師）

① 青少年赤十字指導者として十分な指導歴を持ち、リーダーシップ・トレーニング・センター、県指導者講習会等の参加経験があり、青少年赤十字ほか赤十字の基本的理解ができていること。

② 心身ともに健康で、事前・事後研修に参加することができること、帰国後各地区において行われる報告会に参加できること、支部長（知事）表敬訪問ほか現地派遣期間中の集団生活による研修に支障なく参加できること。

- 事) 表敬訪問ほか現地派遣期間の集団生活による研修に支障なく参加できること。
なお、健康診断書の提出は求めないこととする。
- ③ 将来とも赤十字活動に関わっていこうとする意欲があること。
- (4) 記録写真、ビデオの利用
事前事後研修、現地派遣中、報告会での派遣メンバーの活動状況を写真やビデオに撮影したものについて、赤十字の事業紹介等広報活動で使用することに承諾いただけすること。

8. 応募書類、応募期日

高校生及び指導者（教師）の派遣を希望する青少年赤十字加盟高校並びに被災高校の生徒及び青少年赤十字加盟高校の教師は、応募書類（別紙1、別紙2）を平成26年5月16日（金）までに日本赤十字社福島県支部へ到着するように送付するものとする。

なお、応募受け付けは、一つの高校につき生徒1名とすることで、学校内でよく調整願いたいこと。

9. 派遣メンバーの選考

(1) 選考

日本赤十字社福島県支部は、提出書類等を審査し、特に青少年赤十字加盟高校については過去の派遣実績、地域バランス等を考慮し派遣メンバーを決定する。

日本赤十字社福島県支部は、結果を速やかに応募のあった高校へ通知する。

(2) 参加承諾書

派遣メンバーとして決定された者は、すみやかに参加承諾書（別紙3、別紙4）を日本赤十字社福島県支部へ提出する。

(3) 派遣の取り消し

派遣メンバーとして決定された者について、後日不適当と認められた場合には、派遣を取り消

すことがある。

10. 研修内容

- (1) フィリピン赤十字社訪問・関連施設見学
- (2) 青少年赤十字加盟学校訪問・青少年メンバー、地域住民との交流
- (3) 伝統文化・史跡視察・フィリピンの災害対応研修
- (4) その他 フィリピン家庭訪問、青年ボランティアとの交流、未使用文具等の寄贈、関係団体訪問

11. 経費

- (1) 参加者本人負担
パスポート取得経費、予防接種代（1万円を超えた場合に超えた分）、旅行中のこづかい、個人的なお土産代
- (2) 日本赤十字社福島県支部負担
国内交通費、渡航費、生徒の海外旅行保険代、宿泊、食事、予防接種代（上限1万円）ほか(1)以外の経費

12. 事前・事後研修

派遣に先立ち、派遣国の状況、交流内容等についての事前研修会を実施する。

帰国後は、報告書作成、各地区での報告会実施等のための事後研修会を実施する。

日程の詳細は、派遣決定者に追って通知する。

事前・事後研修会の参加に要する旅費は日本赤十字社福島県支部が負担する。

(1) 第1回事前研修会

- ① 期日 平成26年6月下旬（14日(土)または21日(土)を予定）
- ② 場所 日本赤十字社福島県支部
- ③ 内容 派遣事業の概要、赤十字と青少年赤十字について、代表・団員としての心構えについて、フィリピン青少年赤十字との交流

内容について、その他

(2) 第2回事前研修会

- ① 期日 平成26年7月下旬（19日(土)または26日(土)を予定）
- ② 場所 日本赤十字社福島県支部
- ③ 内容 派遣日程について、事前研修のまとめ、研修旅行に関する諸注意、その他

(3) 事後研修会

- ① 期日 平成26年9月下旬（20日(土)または27日(土)を予定）
- ② 場所 日本赤十字社福島県支部
- ③ 内容 派遣概要の報告、報告書の作成について、資料整理、その他

(4) 派遣報告会

県北、県南、会津、いわき・相双の各地区において秋季総会時（10月）及び県大会（11月）に行う予定。

(5) 支部長（知事）表敬訪問

出発前または帰国後、福島県庁との調整により必要により実施する。

13. その他

帰国後は、研修の成果を自校ほかそれぞれの地域等で広く公開いただくようご配慮願います。

なお、現地の治安事情等止むを得ない事由により派遣を延期または中止することがあります。

持 参 の 交 流 物 品

公式訪問先への記念品

- ・起き上がり小法師（大）
- ・トピックアルバム
- ・福島県、福島市 英文パンフレット

フィリピンRCYメンバーへの記念品

- ・福島県マスコット（きびたん）ステッカー
- ・JRCバッヂ
- ・JRCワッペン
- ・手作りトートバッグ

公式訪問時の交流物品

- ・お茶道具
- ・浴衣
- ・福島県、学校生活、JRC活動の写真パネル
- ・絵描き歌CD
- ・JRC旗一式
- ・日本国家CD
- ・音楽CD
- ・チェキ（ポラロイドカメラ）
- ・Surface Pro

あとがき

東日本大震災の後、フィリピン派遣が県内高校生を対象とした復興支援事業として昨年から再開しました。フィリピン派遣の実施は、国際理解の重要性をよく理解しているメンバーや顧問等の学校関係者からの強い要望もありました。

昨年参加したメンバーは今年度の県や地区の役員として中心的な活動をしています。また、卒業メンバーは青年奉仕団、学生奉仕団としても活動を行っています。フィリピン派遣に参加したことが今までのJRC活動の中に何かしなければならないという使命感を持つきっかけになっているように感じました。

JRCの実践目標の1つである「国際理解・親善」の具体的な活動のフィリピン派遣を実践目標の「気づき」「考え」「実行する」とと結びついた活動も行われています。高校生メンバーが参加できる県南地区の「海外助け合い街頭募金活動」に20に数名参加し、寒風の中、笑顔と大きな声で募金を呼びかけてくれました。自分たちでできることから実行してゆきたいという気持ちの表れではないでしょうか。

2年続けて定員を上回った派遣メンバーの応募がありました。選ばれた者としての自覚を持ち、事前・事後の研修会に参加し、帰国報告会を通じ学校、地区、県のJRCメンバーに派遣の意義、成果を伝え大きな影響を与えているだけではなく、広い視野で物事に臨む態度が備わることで今後の活動の発展につながっていくと思います。

この機会を与えてくださった学校関係者、保護者の方々、フィリピン赤十字社・支部と青年ボランティアの方々をはじめ皆様に感謝申し上げます。

日本赤十字社福島県支部青少年赤十字担当 金子久仁子

